ての理の上から確手たる變らぬ心を定めて置かなければならぬので、即ち心の定木を定めて置くのであります。それを神様は御授けを御波し下さる時に、一日の日に生涯の理を定めよと仰せられて居るのであります。

是れを要するに理の上から定めた確かな心がないから、其の時其の場で慾の心から、種々の心を定めるのであつて、それが皆其の場だけの理となるのであります。その爲めに斯うも定めるのに何故かいなと云ふ樣な疑ふ心も出て來るのでありますから、理をよく聞いて根本から確立した理を心に定めて置かなければ、自由に神樣の御守護を受ける事が出來ないのであります。

□





お道で實と云ふのは事實と云ふ意味の實を云ふのでありまして、是れを云ひ換えれば神樣の御守護を云ふのであります。其神樣の御守護を買ふのには價で買ふのやと云はれてあります。價と云ふのは普通は金錢の意味でありますが、茲で云ふ價は金錢と云ふ意味ではありません。教祖が是れから御助一條の賣店を出す、心の價もつて買ひに來いと仰せられた、心の價を云ふのであります。即ち此の心の價を以つて眞實を買ひ、以つて事實の守護を受けるのであります。

尙ほ是れを碎いて申しますると我々人間は、我が心であつて我が思ふ通りにならぬものであります。即ち眞實にならうと思ふても容易になれないのであります。所が此の眞實は教祖に於いて始めて見出さるものでありますから、我々は教祖から此の眞實の理を頂かねばならぬのであります。之を逆に云へば教祖に眞實を寫して貰はねばならぬのであります。それには我々が教祖を尊び教祖のなさる事に心を合はせて、共に働かして頂くより外はありません。是れが即ち盡し運びでありまして、此の盡し運びが出來てこそ理も移して貰へるのでありますから、此

の盡し運びが卽ち心の價となるのであります。

其の心の價を出す爲めに、時には智慧を以つてする人もあれば、財を以つてする人もありますが、要する所は神樣に受取つて貰ひ、其の眞實を得る爲めであります。斯くして其の眞實が自分のものになれば、今度は神樣が其の眞實にのつて、自由用の御働きをして下さるのでありますから、守護と云ふ實が現はれて來るのであります。

是れを例へて申しましたら、人間は喜んで通らなければならないと聞かして貰ふても、又自分が喜ばうと努めても如何しても喜べぬのであります。それはつまり理がないからであります。其所で神樣の爲めに何にか好い事をする、左樣すると何時の間にか心に喜びが湧いて來て居るのであります。斯樣に眞實と云ふものも敎祖の爲め神樣の爲に、努めさせて貰ふたら直ぐ心に出て來て居るのであります。

御道に於いて盡し運びが道やと云ふて、人々が神樣の爲めに働くのは、要するに此の意味に





外ならんのであります。故に何んでも心の價を出して此の眞實は買はして、頂かねばならんのであります。眞實さへ我が心に出來れば、神樣は其の眞實を受取つて自由用を見せて下さるから、事實の上に御守護が頂けるのであります。病氣の助から難儀の助かるは、皆此の眞實からの天の與へであります。

□

此の御道は人間の心を澄まして、神樣と人間とが心から交つて、此の世を神一條の世とする事にあるのでありますから、人間の心を澄ますと云ふ事が、最も必要なる事であります。所が學問と云ふものは人間の智識を增さすもので、處世の上には必要なるものでありますが、學問をしたと云ふ事が必らずしも心が澄むと云ふ事ではありません。現に學者と云はれて居る

人々を見ましても、其の人の心が一切の欲望から離れて居ると云ふ事はありません。却つて支那の人の云つた通り、人生字を知る愛の始めで、種々の汚れた心を持つて居るのであります。

然し普通の人は人の心を見極める事が出來ませんから、學者と云へば何ぞ特別に尊い人の樣に思ふて居る風があるのであります。其結果其の人の心が汚れて居てもそれを思はずに學者であるからと云ふので、異なつたる取扱ひをするのであります。然し神樣は左樣した事に關係ないので、學者であろうと金持であろふと、慾心があれば慾心のあるだけ、間違つた事があれば間違つた事のあるだけ、文字を知らぬ者も知つた者も同じ樣に、身上を以つて手入れをなさるのであります。故に此道を說く者は神の意志を說くのでありますから、其の間に何の差別を置かずに、平等に取扱つて行かねばならぬのであります。是が卽ち踏みならすのであつて、其所に差別を置くのは高低を其儘にして置くのであるから、踏みならしたとは云へぬのであります。

斯樣に學問のある者も無い者も、同じ樣に取扱ふ樣になるのには　我が心を澄まさねばならぬのであります。何故なら人間が弱くなつたり頭を下げたりするのは、要するに欲する心があるからであります。金を欲するものは必らず金に頭を下げまするし、位の慾しい者は位に頭を下げ、物を知りたい者は學者に頭を下げるのであります。然るに心を澄まして何事も欲せない無欲の心になれば、世の中に頭を下げるものがなくなるのであります。故に無慾になつたらば唯單に學問のみが踏みならされるのみならず、此の世の一切を踏みならす事が出來るのであります。基督が其の死の前に立つた時、我れ世に勝てりと云つたのは要するに此の一切に頭を下げずに、此の世を終る事を意味して居たのであります。

西鄕が酒も女も命もいらぬと云ふ者程やつかいな者はないが、此のやつかいな者でなければ、國の大事は語れぬと云つたのは、全く此の意味に外ならんのであります。此の道を通る者も先づ自分の心にある一切の慾望を、打ち捨てゝ行かねば何事も出來ぬのであります。其の心であつたならば世の中に、何一つとして恐るべきものがないのでありますから、學問の有無なぞ

は問題にならんのであります。斯うなれば始めて文字を踏みならしたと云へるのであります。

□

御教祖が御歸幽になる前の年の晩れに、神樂勤めにかゝれと仰せられたのであります。然るに其の當時は警察が御地場の門前で張番して居た頃でありますから、其の事情を申し上げて暫らく延期を願はれたのであります。すると其の時はそれを承知になつたのでありますが、其の翌年の正月廿六日になつて、今と云ふ今は今やと仰せられて、神樂勤めを御急き込みになつたのであります。

是れは御教祖の上に付いて申したのでありますが、更らに此の意味を各人の上に取つて考へたら、神樣はやはり此事を萬人に仰せられているのであります。何故なら人間の一生には斯う





した拔き差しの出來ん樣な日が、必らず一度や二度はあるからであります。それを神樣は越すに越せんと云ふ一日の日がある程にと仰せになつて居ります。越すに越せんと云ふ一日の日と云ふのは、例へば大病人になつて今日一日が越せんとか持てんとか云ふのが、卽ち其の一日であります。そんな日が人間には無いと云ふことは出來ない、必らず一度はあるのであります。

其の一日の日を無事に通り越さして頂くと云ふのは、日常神樣の爲めに勤めさして貰ふて置る德に依るのであります。昔しの武士は劍術を稽古をしましたが、何にも毎日白刃を拔いてふり廻はす爲にするのではありません。道中をして惡人に出合ふとか、我が身に害を及ぼす者が出て來るとか、左樣した我身に降りかゝつて來る危難を逃れる爲めに修行するのであります。それと丁度同じことで此の道を御互ひが治めさして貰ふのも、今日の爲めになるのもあればならん事もあるのであります。然しさあと云ふ一日〳〵が來た時、日常劍術の稽古をして置かない者は、其の敵の爲めに害を受けねばならぬ樣に、病氣の爲めに我が身を捨てなければなり

ません。けれども日常よく心を治めて置いたら、早やく理が悟れるから普通の人なら死んでしもう所でも、助かつて其の危難を逃れる事が出來るのであります。

故に御道と云ふのは今云ふて今貢ぐに役に立つ事もあれば、左樣で無い場合もあるのであります。然し何れにしても難儀を助かつて行くのでありまして、それは日常の心使ひにあるのでありますから、日々の理をよく治めて通らねばなりません。

□

神樣の教へと云ふのは他の教への如く、命令したり戒めたりするのではなく、天の理を其の儘說くのでありますから、說き流しの教へとも仰せられたのであります。卽ち天の理とは斯う云ふものであると說くのであつて、例へば八つの埃の如きも是非取り去らねばならぬと、强要





するのではありません。其の說き流しの理を聞いて、自分の心で成程と會得したら、その會得した通り自分が踏み行ふたならば、其の心通りの御守護を神樣はして下さるのであります。

斯樣に天の理は說き流しであるから、其の人の悟り樣では如何ともなるのであります。若し惡い心で其の教理を聞いたら、其教理は惡い樣にも見え理屈を云ふ材料にもなれば、好い心で聞いたら自分の身を治め家を治める理ともなるのであります。其の有樣は丁度天から降る雨の樣なもので、雨と云ふものは萬物を育てるから、其の中には藥草も育てば毒草も育つのと同じであります。卽ち聞樣取り樣一つに依つて、それから如何なる理も生じて來るのであります。

そこで天の理と云ふものは成るべく大きく取つて行かねばなりません。何故なら神樣の御心と云ふものは廣い大きなものでありますから、其の理を廣く大きう取て行かねばならぬので、神樣は一言の理は萬言に悟れ、又た一人の諭しは萬人の諭しと仰せられました。是れに依つて見ますると神樣の御言葉と云ふものは、其の事のみに限つてしまうのはそれは、決して正しい

見方とは云へません。出來るだけ廣く出來るだけ大きく悟つて行かなければ、神樣の御心に添ふ事が出來ぬのであります。

又た神樣は望みは大きうもて、大きいものなら半分出來ても大きい、小さい事は皆出來てもしれたものやと仰せになりました。是れから考へても大きう悟らして頂いて、大きい望みを持たして頂くのが、神樣の御心に適ふのであります。

然るに世の中には、大きく悟ればどこまで大きくなるか分らん此の天の理を、自分の心が小さい爲めに小さい事の樣に悟つて、神樣の思召しさへ小さい事の樣にしてしもう者があるのであります。是れは一面から見れば甚だ熱心な樣でありまするが、其の實神樣の御働きを止めているのでありまして、左樣云ふ人には決して神樣は自由用の働きをなさらんのであります。

以上の樣な譯でありますから、此の道は何んでも大きい心になつて、天の理も大きい心をもつて悟つて行かなければなりません。大きいなれば入れ物相應の理を與へて下さるので、信徒





にした所が、其の他の物にした所が天の惠みが豐かに下つて來るのであります。小さかつたらそれこそ心通りの守護で、いくら神樣の御守護を願つても、心が小さいから大きい理を見せて頂くことは到底出來ないのであります。

□

人間が一生を渡つて行くのは、丁度旅をしている樣なものでありまして、其の間にはどんな日もあるのであります。春の日の樣な長閑な希望に滿ちた日もあれば、又た五日雨の降り續く時の樣に、毎日泣いて暮さねばならぬ時もあり、又た夏の日の樣な活氣旺盛な時もあれば、秋の日の樣に物の熟する時があるかと思へば、冬の樣に沈默せなければならぬ時がある樣に、種々なる日や時が一生には現れて來るものであります。

其の中を人間が通つて行くのでありますから、それは丁度雨の日や風の日を通つて行くのと同じで、それに相當する樣な仕度をして旅をして行かなければなりません。雨の降つてある日に雨傘をも差さずに歩るくのは間違つて居る樣に、天氣の日に雨傘を差すのも間違つた事であります。又た雨風の中を通るには、唯の雨の樣な用意をして居たら吹き飛ばされて、傘も失ふてしまはねばならぬのであります。又雪の日は雪の日と云ふ樣に、其の日其の日の天氣に依つて、自分の仕度を變へて行かなければ旅は出來ぬのであります。

其所で人間の心もそれと同じ事でありまして、悲しい苦しい境遇にある者は、飽く迄も強い心を持つて悲しみや苦しみの爲めに、敗けぬ樣にして行かねばならんのであります。左樣かと云ふて仕事が非常に都合よく行つて居る時に、強いのはよいと強きに過ぎたら却つて困る樣な事が出來て來るのでありますから、少しは柔らかい心を以つて、他の人をも育てゝ行く心持ちで通らねばなりません。これが卽ち其の日其の時の天氣に從ふて、道具を使ふて行くのであり





まして、左樣してこそ如何なる者も使ひ道があるのであります。

然るに多くの人は此の道理が分らぬ所から、天氣の日に傘など不必要だと聞いたら、其の言葉のみを考へて天氣を見ると云ふ事をしませんから、雨の日にも傘を持たずに濡れ鼠の樣になつて正しい事の樣に、思ひ違ひをしている人があるのであります。卽ち是れは教理のみを聞いて、神樣の思召しを知らぬ人々であります。それでは教理に囚はれて居ると云ふ外はないのであります。故に教理に囚はれずに、天氣の都合に依つて、自分の仕度を改めて行く樣にせなければなりません。

斯うして天氣に從づて仕度を變へて行つたら、凡ての道具が生きて働くのでありまして、其の道具とは人間の心であります。卽ち强剛柔弱皆な所を得たならば、用に立つのでありますから、凡て惡用せず善用する樣に心懸けて行かねばなりません。此の善用が雨と云ふひよりより見て使ふ道具と云はれるのであります。

□

神様の御話を聞かして頂くのは、神様の御心を傳へて貰ふのでありますから、神様の御說き下された教理の大體を聞いた上でなければ、細かい教理は悟れるものではないのであります。然るに今日では是の根底をなす所の教理の大體を聞くよりも、病氣に對する御諭などを聞きたがる人が多いやうであります。

然し御諭も要するに神様の御思召しが、如何であるかと云ふ事を說くのでありますから、此の神様の御心を知らずに說いても、又聞いても何にもならんのであります。現に斯様云ふ人が澤山あります。自分は病氣を助けて貰ひたさに、多くの方の教理を聞いたが人々に依つて云はれる所が違つて居て、どれを信じたら好いのか分らぬから、教理などはあまり多く聞かない方





がよいなどと云ふ人があります。是れは神意を見出す事を忘れて、唯教理のみを聞くから斯う云ふ事になるのであります。

尙ほ是を御教祖傳などに付いて考へましても、御教祖が五十年間御苦勞下された、大體の道すがらが分つてゐたならば、處々に付いて詳しい話を聞いても諒解出來るのでありますが、教祖の道すがらを全然知らずて、角目の事をいくら詳しく聞いた所が、それが全體に對して如何云ふ關係があるのか分りませんから、聞く話しが會得出來ない樣になるのであります。だから先づ教祖傳の大體を知て置いて、それから個々の點を詳しく聞く樣にせなければなりません。

それと同じでありまして教理にした所が、御道の教理は大體如何云ふものであるかと云ふ事を會得して置いて、それから個々の場合を聞かして貰ふたらよく分るのであります。卽ち一つの病氣に付いての諭しや事情に付ての諭し等が、直ちに會得出來る樣になるのであります。

然るに多くの人は此の大體の教理を聞かずして、直ちに個々の教理に付いて聞かうとするか

ら、それがあちこちつまんだ樣な話になつてしまふて、終には神意を理解する事が出來なくなるのであります。そして自分教理の價値を疑ふ樣な事になるのでありますから、斯うした間違ひをせん樣にせなければなりません。

又た人に教を傳へる場合にしても始めての人には教理の大體を說き聞かせて、それから御諭しをする樣にせなければなりません。人に會ふなり直ぐ御諭しをすると云ふのは、一寸人を驚かす事は出來ますが、それでは肝心の神樣の御心を傳へる事が出來なくなりますから、お諭しは少し教理が分つて來てからする樣にして、成るべくならば教理の大體を說いて、神意の如何なるものであるかを會得せしめる樣にして行かなければなりません。

□





人を助けたら我身助かるとは、御道の人は誰れでも知つて居ればこそ、人を助ける爲めに苦勞して居るのでありますが、それなら何故人を助けたら我身助かるのであるかと云へば、一寸分らなくなるのであります。そこで人を助けると云ふ事は如何云ふ事であるかと云へば、即ち自分が喜びを得ると云ふ事であります。此の喜びと云ふものは、實地に付いて人を助けた經驗の無い人には分り惡いのでありますが、それは實に嬉しいものであります。人を助けると云ふのは此の心の喜びを得る爲めにするのであります。

お助けは苦しまなければならんと思ふて居る人がありますが、それは形の上でありまして心は非常に樂しいのであります。又樂しみの理なら神樣も受取つて下るのでありますが、布教を泣き〳〵したり大儀大層の心を以つてしては、神樣も御喜び下さらねば御助けも出來ないのであります。ですからお助と云ふものは何處までも、人間が樂しみの理を見さして貰ふ爲めにするのでなければ本當ではありません。

其所で御助けは今申した通り喜びの理を得る爲めにするのであつて、神樣は心通りの御守護を下されますから、心に喜びがあれば必らず好い御守護を下されるのであります。それで普通ならば助からぬ樣な所も助かる事が出來、通れぬ樣な所も通れるから、即ち我身が助かるのであります。

それに引換へて人を困らし人を苦しめ、人をつぶす樣な事をするのは、それだけ自分の心を苦しめて居るのであります。何故なら人を困らし苦しめるのは、一寸考へたら面白い事の樣に思ふ人があるかも知れませんが、その人の心の奥に這入つて考へたら、必らずそれを苦にしてゐるのであります。心が苦しんだら神樣の御守護も從つて苦しまねばならぬ樣な御守護をせられますから、助かるべき所も助からず通れるべき所も通れぬ樣になつて苦しまねばなりません。

是れを更らに分る樣に申せば人を助けるのは、喜びと云ふ藥を日々飲んでゐるのでありまして、自然自分も助かつて行きますが、人を苦しめるは日々苦しみと云ふ毒を飲んでゐるのであ





りまして、今度は反對に苦しんで行かねばならんのであります。

次に世界をつぶすと云ふのは、此世は神樣が御意匠なされて造られた所であり、人間は陽氣暮しをする爲に造つて頂いたのであります。然るに此の世が面白くないとか苦の世とか云ふて、是の世を否定するのは即ち此の樣をつぶして居るので、其結果は自分が自殺するか死を願ふ樣になるより外はないのであります。斯樣に世界を否定する者は、自分が死で行かねばならぬから世界をつぶしたならば、自分自身が全くつぶれになつてしまうと仰せられたのであります。

□

梅の木ならば梅の木として、櫻の木ならば櫻の木として、特別な性質のあるものであります。然るに木でない竹を其の木に次ぐと云ふ事は出來るものでもなければ、よし出來たとした所で

それは枯れてしまふか、其の特有の性質を殺す樣なものであります。

然るに人間と云ふものは慾の深いもので、他人の花は赤く見えると云ふ譬の通り、自分のあるものよりも他のものを欲する心が多いのであります。其の結果木と木ならば未だ次木が出來ますが、竹を以つて來て次ぐ樣な事を往々するのであります。

此を御道の上に付いて申しましたら、此の道は神樣の御思召しを傳へるのでありますから、道の話は皆神樣の御心から出た事でなければならんのであります。然るに話を上手にしたいとか、人に譽められたいと云ふ樣な慾心から、神樣の御心を說く事を忘れて、話の中途から世界の學者が書いた事を云ひ出したり、自分の考へを持ち出したりするのは、要するに木に竹を次いでゐるのであります。近頃は斯うした風の話が澤山せられる樣になりましたが、その爲めに神樣の御受取りなく、靈救が現れなくなつて來たのであります。

然し是れは當然の事でありまして、人間としても自分の云はない事を中に立つ人が、勝手に





作り話をしたら其の責任は負はないのであります。神樣にしましても神樣の仰せられた通りの事を傳へて置けば、神樣は仰せられた通りの御守護をせられるのでありますが、人間が勝手な事を云ふて置くから、神樣は御存知ないのであります。從つて神樣の御働きがなく自分の話した事が、皆無駄になつてしまふのであります。

更らに是れを敎會等に就いて考へましても、斯う云ふ事があるのであります。それは御道が今一段發達せない所から色々考へて、昔しと今とは時代が違ふのである、基督敎や佛敎に於いては、斯樣云ふ風にして遣つて行くから盛んになるのだ、自分の敎會も方針を變へなければならんと云ふので異つた事をやる者があります。是れは一見甚だ時代に適して居る樣でありますが、然しそれは梅の木ならば梅の木の性質を殺して居るので、左樣した敎會に發達した例は無いのであります。故に神樣は斯うした事に對して、風の變つた樣な事をしては、道とは云へんと仰せになつたのであります。

更らに是れを人間の本心に付いて考へましても、自分が信仰して居る所のものは唯一つのものでなければなりません。然るに時々に人の云ふた事や聞いた事に心を動かされて、其の信仰を變へると云ふのでは、木に竹を次ぐのと同じでありまして、其の結果は自分を枯らすより外はないのであります。故に此道に於てはそれが如何に惡く見えやうとも、その爲めに心を變へて他から木に竹を次ぐやうな事はせぬ樣に注意して居なければ、思はぬ時に思はぬ間違ひが生じるのであります。

□

洗かへと云ふ事は人間の心は丁度、汚ない衣物の樣なものであるから、それを洗ひかへるのでありまして、それは如何するのであるかと申しますると、神樣の敎理を聞かして貰ふて、心を洗つて頂くのであります。御神樂歌に水と神とは同じ事、心の汚れを洗ひ切ると仰せになつ





て居ります。卽ち自分では自分の汚ない衣物は洗へるものではありませんから、清水に依つて洗つて貰ふので、それを洗ひ變へと云ふのであります。

次ぎに次ぎ變へと云ふのは、人間の本性と云ふものは長らくの間通つて來た間に、惡因緣を付けて來て居るのでありますから、其の儘にして置けば恰かも藪梅の如きもので、美くしい花も立派な實も結ぶ事が出來ません。それで次ぎ木をする樣に、今日まで自分の持つて居た心を捨てゝ、御敎祖の御心を心として通つて行くのが、卽ち次ぎ木をするのであります。次ぎ木さへすれば自分としては行く先に、苦しい事や困らねばならぬ事があつても、心を切りかへてあるから、それを逃れて通る事が出來るのであります。それが次ぎかへであります。

次ぎに立てかへと云ふ事でありますが、是れは家を立て替へる樣なものであります。と云ふのは人間は文明になつて來る程心が小さくなつて來ましたから、物を見ては直ぐ泣いたり、人に惡口でも云はれたら腹を立てたり、家に事情が出來たら心配するのであります。是れは要す

るに心の家が小さい弱いからでありまして、それを立て替へて強い大きい家に住んだら、泣く事もなければ腹の立つ事もなく、心配する事もなくなるのでありますから、教理を聞いて大きい心の家を建てゝ行くのが、心の立てかへと云ふのであります。

是れを要するに今迄持つて居た古い心を捨てゝ、新しい心になるので、此の新しい心になつたのが道の初めであります。それ故今迄も今が此の世の始りと、云ふてあれども何んの事やらと仰せになつて居ります。即ち自分の心の立て直つた時が始まりで、それから新しい芽が吹き枝が出來て來るのであります。

然し斯うして心の切り變へが付いて、枝から枝が出る芽から芽が出ると喜んで通れる迄には、少なくとも五六ヶ年の年月を要するのであります。然しそれも熱心に道をやつての事でありまして、心の切りかへをして後がつゞかなかつたら、榮へると云ふ理は見せて貰ふ事は出來ないのであります。故に六七年は一心になつて通らねばなりません。



# 一つの心

世間で普通に誠と云ふのは、人に對して親切であるとか、慈悲深いのを誠と云ふのでありますが、お道で云ふ誠は少し意味が異ふのであります。では如何云ふのを誠と云ふのであるかと申しますと、それは至極分り易い嘘で無い、本當の事を云ふのであります。斯う一と口に僞で無い本當の事と云へば、何んでもない樣でありますが、是れが中々六ヶ敷いのであります。

今是れを分り易い樣に例を以つて申しましたら、人は他人に對して貴方は親切な方だとか、中々行き屆いたお方だとか、相手の好い事を云つて惡い事は云はないやうにするのであります

が、それなら心の中でも口で云ふ通りに思つて居るのかと云ふと左樣でない。嫌な奴だとか氣に喰はぬ奴だとか思つて居る、此の場合口で云ふて居るのは僞であつて、心の内で思ふて居るのが本當の事であります。だから嫌な者は嫌い好きな者は好きと云ふのが、本當の誠と云ふのであります。

然し更らに考へて見ますと、心の内で思ふ事それが本當の事であるかと云ふに、是れも又嘘になつてくるのであります。何故なら人の好き嫌ひと云ふ事は、深く思索して見ると、多くは自分と共通點を持つて居ない場合に嫌と云ふのであつて、其の嫌な者でも利害や目的を等しうする場合には好きになるものであります。左樣して見ると人の好き嫌ひは、要するに未だ本當の事ではない、何處かに僞りの分子が含まれて居る所があるのであります。

其所で自分も他人も何んの利害も目的も持たない、單なる人間として見た場合には、相方の好き嫌ひの感情が一掃されてしまつて、其所に融合した心が湧いて來るのであります。此所ま





で進めば唯人間に對してばかりでなく、一切の生物に對して同じ心持を抱く事が出來るやうになるのであります。此の心が本當の心であつて此の心から見たら、人間が好き嫌を云ふて居るのは、未だ虛僞である事が分つて來るのであります。お道では此の心を誠卽ち本當の心と云ふのであつて、世間で云ふのとは違ふのであります。

尙ほ此の事を例に附いて申しましたら、丁度梨の如き菓物と人の心とは同じ樣なものであります。菓物の表面は皮であつて、人間の心の表面も嘘の皮で、取圍まれて居るのであります。菓物の皮を剝いだら身がある樣に、人間の心も一皮嘘の皮を剝いだら、親身が現はれて來るのであります。世界で云ふ誠とは此の親身の事を云ふのであります。所が其の身を取り去つたら蕊が出て來るのであります。人間の心も親身を取り去つたら、始めて眞卽ち誠が現はれて來るのであります。そして其の蕊に復活する種がある樣に、人間が復活する種も、誠の中に含まれて居るのであります。菓物に於いて皮や肉や蕊が腐つても此の種子がある以上、再び大きい

木が生じるので、人間も嘘の皮や肉親の情や誠の行ひは、何時か消える時がありましても、其の種子たるものは永遠に生命を宿して行くのであります。

以上は誠の存在する所を說いたのでありますが、若し人間が事實に於いて此の誠の心を自覺し、其の誠の心を以つてすれば、自分の通るべき將來の道が、自分の心に分つて來る。卽ち浮んで來ると斯う云はれるのであります。

此の事を明らかにするには、先づ世界の人が此の世を如何見て居るかと云ふ事から始めねばなりません。世界の人は此の世を一寸先は黑暗やと云ふてゐる。卽ち明日の日は如何云ふ事が起るか、一時間後には何事が來るか、殆んど豫測が出來ないのであります。是れは丁度眞黑暗の中を歩るいてゐるのと同じであります。

黑暗の中を歩るくのは、前に何があるか分らぬのでありますから、危險であるに相違ありません。けれども提灯を持つとか、或は電氣を持つとしかして歩るいたら、足下が分るだけ危險が





ないのであります。行く先々の道が分つて來るのであります。所が世の中の人は嘘の皮を心に着て居るから、此の世が眞黑に見えるのでありますが、嘘の皮を剝いで、心に誠を治めて居る人は、提灯を持つて居るのと同じで、自分の行く先が分るのであります。それ故誠一つの理を運べば、先々が心に分ると仰せられたのであります。

所が此の心に浮ぶと云ふことでありますが、これは大抵の人は何んでもなく見過してしまうのであります。然し此の一言葉が、御道では非常に重大な意義を持つて居るのであります。それは神樣が浮ぶ理が天の理と仰せられた、御言葉に依つても明らかであります。

心に浮ぶと云ふ事は、何んでも無い事の樣に思ふのでありますが、此の心に浮ぶ理一つに依つて、一生の幸不幸を決定する場合があるのであります。例へば結婚するので見合ひをする樣な時に、何かのはづみで相手の男なり女なりを、ふと嫌だと心に浮んだのが因となつて、其結婚を中止した爲めに、不幸から避け得たと云ふ人もあれば、それが爲めに再び取り返しの附か

ぬ不幸を招いたと云ふ樣な人もある。此の場合にはふと心に浮んだ理が、其の人の一生を決定してしまつたのである。

又斯う云ふ大きい問題でなくとも、商賣上に於ける物の賣買に付いてみましても、心に浮んで買ふたのが、値上がりして非常に利益を得る人もあれば、それが爲めに却つて損をする人もある。斯く心に浮ぶ理と云ふものは、何んでもない事のやうでありますが、實は甚だ大切なものであります。

尙ほ此事を布敎に付いて考へましても、病人の前へ座つて御助けをする時、說く敎理が立派であつても、心に助からぬ理、卽ち此の人の病氣は助からんとか、此の病人は死ぬだらうと云ふ心が、浮んで來たらば如何するか。如何に立派な敎理も、何んの役にも立たん事になるのであります。又よし左樣した心が浮んで來なくとも、病人の心が此方の話通りにならぬのみか、惡るい心のみ浮んで來たら、やはり心通りの守護で助ける事が出來ません。





それなら斯うした不幸を見たり損をしたり助からぬ樣な心を、浮ばぬ樣にしたら好いでは無いかと、思ふ人があるかも知れませんが、此浮んで來る理ばかりは、自分の心でありながら自分の思ふ通りにはならぬのであります。若しそれが出來るものなら、廣い世界に誰れ一人として、不幸に出合つたり損したり助からぬ心を起す者はない。我れ先きに幸福になる心を浮はす筈でありますが、思ふ通りにならないのが、此の浮んで來る心であります。浮んだ理を臺として其上へ道理を附けたり、議論を加へたりする事は出來ますが、浮ぶ心そのものは殆んど絕對性を持つて居るのであります。卽ち人間の支配以上に自由の權威を持つて居るのであります。

然らば人間は何時迄も、此の浮んで來る心の儘になつて居なければならぬのであるかと云ふに、浮ぶ理は千樣萬態でありますが、其處には一つの動かせぬ事があるのであります。それは心に浮ぶ事は何時か其の人が見た事があるか聞いた事があるか、兎に角經驗した事より浮んで來ないと云ふ事であります。

例へば我が故郷を心に浮べて御覽なさいと申せば、直ちに心に浮んで來ます。然し今私しが他人の故郷を思ひ浮べよふとして、如何に努力しても、それを心に浮べる事は出來ないのであります。すれば心に浮ぶ事は過去の經驗がさす事であると云ふ事が出來るのであります。從つて之れを逆に云へば、現在各自の持つて居る心は、其の人が過去で經驗した、總和であると云ふ事が出來るのであります。

右の如く心に浮ぶ事は、過去の經驗が再生して來るものであるから、誠の心を浮ばさうとしても、過去に於いて誠の事を行ふた事實がなかつたなら、誠の心が浮んで來ない。誠の心が浮んで來なかつたら、誠の行ひが出來ぬ。誠の行ひが出來なかつたら、未來に於いても誠の心が浮んで來ないから、人は永久誠の味を知らずに過さねばならぬ道理であります。若し左樣だとすれば不幸なる人は何時迄たつても、不幸の境から出る事が出來ずに、苦しみとうさねばならぬ道理であります。然し人生の事實として左樣なつて居るのであるから仕方がありません。





そこで始めて信仰の必要が起るのであります。それを平たく說明致しますと、自分には誠を行ふた事實もなく、誠の心が浮んで來ないから、自分の心では誠の行ひが出來ないから、誠の心を澤山持ち合せて居る人から、誠の心を借りて來て誠の行ひをするのであります。行ふ時の心は借物でも行ふた事實に依つて、今度は自分の心に誠の心が浮んで來るのであります。そこで又誠の心を借りてはそれを行ふ、斯う云ふ風にして百度千度と繰り返して行けば、何時とはなしに自分の心が誠にされて行くのであります。卽ち行ふた一つの事が因となり果となつて、自分が眞實化されて行くので、お道で云へば自分の心を無にし、敎祖の誠の心を以つて、其の敎へ通りに行ひ、自分が次第に誠になつて行くのであります。

斯して誠の量が加はつて行けば行く程、心の提灯の火が明るくなつて行くのでありまして、火の力が强くなればなつただけ、暗の衣を照し出す事が出來るのであります。敎祖は其の誠の火が大きかつたから、普通の人には見えん分らん事をも、豫見して置かれたのでありまして、

誰れでも心の誠の火が大きいなればなつただけ、自分の行く道が明るくなつて來る道理であります。

然し左樣すると誠は人間の本心卽ち本當の事だと云ふ事と、誠の無い人と敎祖の誠を借ると云ふ事の間には、矛盾して居る點がある樣に思はれる事であります。是れは說明上分り易くと思ふて說いたから、斯う云ふ事が起つて來たので、事實に於いて誠の心の無い人は無いのであります。唯誠の量が小さいか未だ開發されて居ないから、無い者として說いたので、敎祖の誠を行ふ事に依つて、實は自己內在の誠の心を開發して行くのであります。卽ち敎理を實行する事に依つて、自分の誠を成長せしめて行く事に外ならんのでありますから、此の點は特に誤解の無い樣にして頂きたいと思ひます。

□





一つの道と云ふのは各人の通るべき道を云ふのであります。卽ち如何なる人も一つの道よりは通れぬのであります。行く先の事を考へたら、それは種々の通るべき道が思ひ出だされるのでありますが、通つて來た過去の道を見顧つたならば、そこには一筋の道より無いのであります。然し此所で云ふ一つの道とは其の意味の一つの道ではなく、神樣に通じる一つの道を云ふのであります。卽ち人間が次第に心を淸めて、神樣に近づいて行くのには、其所に一筋の道より無いのであります。それで一つの道と云はれたのであります。

次ぎに一つの理と云ふことでありますが、是れは神樣の事を云ふのであります。卽ち人間が一筋の道を通つて、最後に到達すべき目標である所の神樣を、一つの理と仰ぜられたのであります。

一つの心と云ふのは各人の心を云ふのであります。然し唯單んに心と云ふだけのものではな

く、一つの定まつた心を云ふのであります。云ひ換へますれば、人間の眞實心を是の場合一つの心と云はれたので、其の他の埃な心では一つの心とは云へないのであります。

其所で此の三つと云へば、卽ち神樣と神樣に通じる爲めに通るべき道と、其の道を通る心と云ふことになるのでありまして、此三つが揃はなければ、眞の道と云ふ事は出來ないのであります。そして此の三つは事實の上でも、離れる事の出來ない關係を持つて居るのであります。

尙ほ是れを例へて申しましたら、丁度綱渡りをする樣なものであります。一つの道と云ふのは其の綱の如きものでありまして、一つの理と云ふのは卽ち綱の結んである結び目でありまして、一つの心とは綱の上に昇つて居る人の、中心を取つて居る時の心であります。此の三つがきちんと揃つて人間が中心を取つて居たならば、人目から見たらあんな危ない事と、手に汗を握る樣な事をして居ても平氣で渡るのみか、普通の人が地上に於いてさへ出來ない樣な事をして見せるのであります。是れ卽ちお道の人が世界並の人から見れば、冒險なことをする樣に思





はれる所であります。

斯樣に中心が取れたら如何なる處も平氣で行かれるのでありまして、お道で云ふ眞實と云ふのは是の中心を取る事であります。然し綱の上の中心は綱の結び目から取らねばならぬ樣に、此の道の中心も一つの理卽ち神樣から取らねばならぬのであります。神樣なくして眞實になると云ふのは目標なしに中心を取るので、それは事實の上で行へないことであります。故に神樣を目標として各自の中心、卽ち眞實になる樣に勤めねばならぬのであります。

□

此の屋敷と云ふのは云ふ迄もなく、御本部の事を云ふておられるのであります。此の御地場は人間を始めて御造りになつた所でありますから、人間に取つての親里であり、生れ故郷であ

ります。故に世界の子供は必らず連れ歸ると仰せになつた程であります。

其處で世界の人間が必らず皆な御地場へ歸つて來るのでありますが、其の歸る子供に安心をさゝねばならぬと仰せられるのであります。然し是れは人に仰せられるのでありまして、お地場そのものは親里でありますから、地場の理は如何せいでも人の心を安心さすのであります。それは丁度嫁入りして居た娘が、親の家へ歸つた樣なもので、親の家は何處がよいかと尋ねられてもそれは分らぬのであります。又た家へ歸つて探した所で、我が家の好い所は見付からぬのであります。然し親の所へ歸れば少々勝手な事をしても親が許して呉れる、家の者は自分のする事を惡意を持つて見ないと云ふ所に、親の家の好い所があるのであります。

お地場もそれと同じで、何所が親里であるかと、お地場へ來て尋ねて歩るいた所で、それは分らぬのであります。然し御地場へ歸つた時の氣分を味つたら分つて來るのであります。即ち都會の人が田舍へなど來ると、非常に淋しく感ずるものでありますが、此のお地場へ來ると少





しもそんな感じは起らない、何んとなく陽氣な安らかな氣分が、起つて來るのでありまして、其所にお地場が親里である證據が見出されるのであります。それ故神樣も皆世界の子供が、胸に尋ねて來るはいなと仰せになつて居ります。

斯樣に御地場へ來たならば親里でありますから、如何なる人も心を安らかに持つ事が出來るのでありまするが、其のお地場に暮して居る人が心が惡るくて、歸つて來た者に不足や不平を持たして歸したならば、やがて親里の理を消して居るのも同じであります。例へば娘が親の所へ歸つて來ても、其の兄弟が意地惡るで皮肉な事を云ふたり、困らす樣な仕打ちをしたならば、再び歸ると云ふ樣な心は出て來ないのであります。是れでは親の心を無にするのであつて、お地場で云へは神樣の御心を無にして居るのも同じであります。

それ故に此御地場で勤めさして頂いて居る者は、世界から歸つて來た子供に安心さす樣にして行くのが、自分の勤めの臺になるのであります。そして又それが親里の理を現はす親孝心の

理になるのでありますから、世界から來た人が喜ぶ樣、安心する樣に取扱ふて行かねばなりません。

然し是れは單んに本部のみではありません。部下の教會もお地場の理を寫して頂いて居るのでありまうから、教會に勤める者はやはり人々を安心さす心を持つて、日々の勤めとして行かねばならんので、それが教會の臺ともなり、各自の臺ともなるのであります。

□

人間と云ふものは誰れしも自分の心を滿足さしたいものであります。故に滿足が出來る事ならば隨分努力をいとはぬのであります。例へば寒い日に火を燃けば、誰れしも其所へ集まつて來る如く、滿足さして貰へる所へなら、少々遠くとも行くものであります。それで神樣は滿足





さす程大きい理はないとも仰せられたのであります。從つて御道を通る者は、世上の人に滿足さして通らねばならぬのであります。そして此の滿足から成り立つて來たものでなければ、眞の道と云へぬので、神樣も滿足を集めて道と云ふとも仰せになつて居ります。

然らば如何したならば人が滿足するのであるかと申しますると、それは人々の爲めになるのであります。けれどもいくら人々の爲めになるのであるからと云ふて、口先で上手を云つたり、眼に見えたりする事で滿足さす樣ではならんのであります。それは一時上手な事を云つたり嘘でも云へば、人と云ふものは滿足するものでありますが、そんな事では此の道で云ふ滿足と云ふ事は出來ないのであります。

すれば此の道の滿足と云ふのは如何云ふのであるかと云ふに、人の心を滿足さすのであります。例へば私し等が如何なる苦勞や難儀に出合ふても、御教祖が五十年間御苦勞下された道筋を思ふたら、滿足して通る事が出來るのであります。それは教祖が我々を滿足さして居て下さ

れるのであります。斯樣に人の心を滿足さすのが此の道の滿足と云ふのであります。

それ故人を滿足さそうと思へば、自分が如何なる苦勞も厭はずに通ると云ふ事が、人々に心から滿足せしめるのであります。一時其の場の滿足の如きは影の樣なもので、其の場離れたら消えてしもうのであります。故に何時迄も人の心に止まつて居て、忘れられぬ樣な滿足の理を與へるには、我身が通つた上から人に滿足さゝねばならぬのであります。

此の滿足をさす理が通れたならば、寒い日に火のあるのと同じであつて、自然世界の人が其の滿足の理を求めて集まつて來るのであります。それが眞の道であつて、此方から呼び歩るいたり集めたりするのは、我が方にそれだけの滿足を與へる理が少ないからであります。故に外へ呼びに歩るくよりも、此の理を造る樣に心を持つて通らねばなりません。

すれば人間は滿足を欲する者でありますから、次第に集まつて來るのであります。丁度陽氣な人を滿足さす家へは自然足が向くが、陰氣な人扱の下手な家へは、人が行かぬ樣なものであ





ります。ですから世界から集まつて來るだけの理を治める樣に、理を積んで行かなければならぬので、それには我が身の苦勞や、我身の難儀を厭ふて居る樣な事では、到底出來ないのでありますから、我身を捨てゝ人を助ける爲めに苦勞を通らねばなりません。

□

此の御道は人間の心から心へ、胸から胸へ傳はつて行くのでありますから、其の有樣は丁度電線の如きものであります。各枝先の信徒の胸に信仰の火が點ぜられて居るのは、此の電線に電氣が通つて居て、火が點ぜられて居るのと同じであります。

然し電線のみでは電燈が付くのではありません。それには電氣をおこす所の發電所があるからであります。そこで此の道の信仰の發電所は云ふ迄もなく地場で、其の發電所から各地に電

線が引いてあるので、それが各教會や宣教所になるのであります。故にお地場から電氣の通ふて行かなければ電燈が付かない譯であります。

電燈の付かないと云ふのは心に信仰の無いのでありまして、心に信仰の無い人は日常を暗黑に通らねばならんのであります。此の世は暗やみであるとか、行く先きが分らんとか云ふて居るのは、卽ち信仰がないのでありまして、心が暗いのであります。電燈が付いたならば暗い家でも明るくなる樣に、此の世が面白い世の中に變つて來るのであります。

是れは單んに個人の信仰に付いて許りではありません。教會に於いても此の電氣の通ふて居ない所は陰氣であつて、少しも教會が發達せないのであります。人間に病氣のある如く、斯う云ふ教會は病氣のある教會であります。從つて神樣の御働きも、十分に受ける事は出來ないのであります。

斯樣に電氣が通はなくなるのは、如何云ふ所から來るのであるかと申しますると、それは不





足から來るのであります。何故なら不足は切る理であつて、不足の爲めに電線を切つて居るのであります。教會に於ける不足は上級の教會を不足にして居るのであり、信徒の不足は教會を不足にして切つて居るので、自分の火が點らぬのでありますから、教會の盛んにならん所は、電線が何處かで切れて居ないかを、よく調べて見なければならぬ樣に、個人の場合に於いても不足があるか無いかを調べて見なければなりません。

そして不足な點が發見せられたならば、それは電線の切れて居る點でありますから、早やく電線をつないで信仰の火を點ぜねばなりません。そうすれば今迄とは異つて明るくなつて來るのであります。所が多くの人の中には、會長の變更や移轉等の爲めに、此の線の切れたのを知らずに、早やく死ぬ人があるので、これは線が切れて暗やみになつたのも同じであります。故に此の道は一筋の糸が切れたらくらがりやと仰せられたのであります。

□

人間の一生の間には如何な日もあるが、其中でも特に苦しい事もあれば困る樣な事もある。例へば商賣上に於いて何をしても損をするし、手を出す事は失敗に終ると云ふ樣な事もあれば、又家庭上に付いて家の者の意見が互ひに衝突して、居るに居られんと云ふ樣な苦しい事もあれば、又た身の上に付いて病氣の爲めに、堪えられんと云ふ樣な事があるものであります。

左樣云ふ場合に多くの人は其の苦痛から逃れる爲めに、何んとか方法を見出したいと云ふ心から、如何したらばよいかと、其の教を受けたいと思ふものであります。是れが世界並ならそれに對して方法を教へるのでありますが、是の道では其の方法などは教へないのであります。本人が其の苦しい中にあつて神意を悟る樣にするのであります。

何故なら教へると云ふ事は、神樣から見れば半分の理よりない事になるのみならず、却つて





其の爲めに苦勞をさす樣になるからであります。例へば碁に於いて助言をして貰ふと、助言して貰ふてる間は强くなることが出來るが、助言が無くなると敗けますから助言をせずに、本人に考へさして自ら悟らす樣にするのであります。それで苦しんで居る時に何故自分は斯う苦しまなければならぬか、又た神樣は何故斯うお苦しめになるのであるか、其の理を自分から悟らす樣にするのであります。

悟つたのは實地に名所へ行つて來たのに同じでありまして、人から尋ねられたら尋ねられる程、色々に話す事が出來ます樣に、一つの悟りは樣々に働いて來るのであります。けれども教へられたのは、教へられた事を聞かれたら答へる事は出來ますが、其の他の事を尋ねられたら答へられないのであります。それで此の道は諭し悟りの道と云ふのであります。

其所で人間が最も苦しんで居る時は、神樣が最も近くへ來て居て下さる時なのであります。例へば兄弟三人あつて、其の中の一人が叱られて居るとすれば、叱られて居る時には親が必ら

ず其の側に居る樣なものであります。そこで人間が苦しい時には、神樣が近くへ來て居て下されて居るのでありますから、其の時神樣の御心を悟らして頂かねばならぬのであります。

そして其の中から成程と云ふ理さへ悟られたら、それが其の人の一生にどれだけの力になるとも、賴りになるとも分らないのであります。神樣の方から云へば左樣云ふ樣に人間が悟つてこそ、神樣がお叱り下された甲斐があるのでありますから、左樣なれば神樣も御滿足下さるのであります。故に何にも云ふ事ないと仰せになつて居るのでありますから、苦しい時や困つた時にはめい〳〵自分の心から、悟つて行く樣に勤めなければならんのであります。

□

人間が此の世へ生れた來た時は、少しのきづもない玉の樣なものであります。けれども如何





に美くしい玉だと云ふても、其の儘捨て、置いたら日がたてば必らず埃が積るのであります。けれども埃と云ふものは拂ひさへしたならば、元の美くしい光を放つやうになりますが、きづが出來たら是れは容易に治まらんのであります。

一體きづと云ふのは如何云ふのであるかと申しますると、人と人とが互ひに衝突する所から出來て來るのであります。例へば自身が苦しめられたから、何んとかして其の仕返しをせなければならんと怨み心を持つたり、又は自分の思ふ事を爲す上に、邪魔をせられた其の腹立ちが忘れられんとか、左樣した所から自分の心を傷付けるのでありまして、それが玉につけるきづであります。

もし斯うしたきづが出來たら、折角の玉も何んの價値もない事になるのであります。然しそのきづも淺ければ又た何んとか方法がありまするが、深いのになると如何も仕方がないので、是れがお道で云ふ惡因緣でありまして、其の爲めに自分の價値を落して、難儀苦勞して居る人

が澤山あるのであります。

かく深いきづのあるのは仕方がありませんが、淺い傷なら磨きさへすれば取れるのであります。すれば磨くと云ふのは如何するのであるかと云ふと、人の心を砥石として我が心を磨くのでありまして、云ひ換れば其の質をへらす事でありますから、我が心をへらして行くのであります。心をへらすのは自分の心で仕たい事や思ひたい心を使はずに、人の爲め神樣の爲めに働いて、心の不自由をして行くのが、即ち心をへらして行くのであります。

神樣は斯うした心のきづに對して、こけ付きの理さびつきの理と仰せられました。左樣したこけつき錆付の理を取るのも、心のきづを取るのも同じでありまして、これは今申した樣に心をへらさねば取れるものではありません。けれども磨くと云つても上等のものを磨く樣に、絹物でなど磨いて居たら、それこそ長い間かゝらねばなりません。だから始めの間はごし〳〵荒い砥石で磨いて行かねばなりません。磨かれる者の身に取つて考へたら、隨分つらい事もあり





ますればなさけない時もありますが、それが磨かれて居るのでありますから、其の中を通つて行かねば磨かれません。

左樣して磨かれて行けば必らず元の樣に光つて來る時があるのであります。心に光りが出る樣になれば、その光が人の心に差し込んで、自然に理が働く樣になるのであります。そして理が身に添ふて來ますから、其の人の心通りに神樣が御働き下さるのであります。其所まで心を疲らさぬやうにして進んで貰はねずなりません。

□

此の道の話と云ふものは誠一條の教でありますから、人間として正しい道を通らうと云ふ心の者には、是の上もない尊い教へでありまするが、誠の心にならうと云ふ望みもなく、正しい道

を踏んで行かうと云ふ志の無い者には、何んの役にも立ちません。日々我身を酒や女に溺れさして、面白可笑う暮して行かうなどゝ云ふ、間違つた心を持つて居る者には、それこそ迷惑至極の教へで、此の道を聞いたばかりに甘い酒も、甘く飲めない樣な事にならうと思はれます。

斯う云ふ譯でありますから、神樣も心の無い者卽ち話を聞いて自分の心を改めて行かうと云ふ心の無い者や、心を改めて身上を助けて貰いたいと云ふ志の無い者には、此の道の話をするのやないと仰せられたのであります。けれども現在では早やく此の道を世界へ擴めねばならぬ、一人でも多くの人を助けさして貰はねばならぬと思ふ所から、布敎する人などは病院の門前に立つたり、公園などに行つて病人を探して匂ひをかけ、無理にでも敎へを傳へやうとする樣になつて來たのであります。

是れは一面から見ますると非常に熱心である結果、斯うした事をせられるのでありますから、大いに稱せねばならぬ事でありますが、さて又一方神樣の仰せられた所から考へましたら、





是れでは理を輕しめて居る樣な事になるのであります。何故なら御敎祖が此の敎へを御說き下されたのは、容易ならぬ御苦勞下された所から、御說き下されたのでありますから、左樣易々と說くべきものではありません。それとも芽の生へて來る肥土の所なら、それは進んで蒔かねばならんのでありまするが、石の上などへ蒔いたら、決して生へないのでありますから、其の種が無駄になつてしもう道理であります。

神樣が性根の無い者と仰せられましたのは、酒を呑で醉ふたあげく、前後のわきまへもなくなつてしまつた樣に、世上の道に現を拔かして暮して居る樣な人を仰せられたのであります。其の中には商賣に心を取られて暮して居る人もあれば、酒色に氣を取られて本性を失つて居る人もあります。左樣した人の心は、丁度石の樣な土地でありまして、いくら好い種を蒔た所で生へるためしが無いのでありますから、左樣云ふ者に話を聞かすなと仰せられたのであります。

是れを道を通る人の上から云へば、自分の心が定まつて居ないで、人々の話ばかり聞いて廻

り、あちらの人の話は斯う此方の人の話は斯うと云ふ工合に、色々話を聞いて、さて自分は如何したらば好いかと云ふ事になれば、何も分らんと云ふ樣な人があるが、是れも性根の無い人であります。左樣云ふ人に對して結構な神樣の御教理を取次ぎしても、何の役にも立たず、蒔いた種も流してしもう樣になるのでありますから、左樣云ふ者には話をするに及ばぬと仰せ下されたのであります。

□

神樣が人間に用を仰せ付けて下さるのは、親が子に用を云ひ付ける樣に、分相應の用を仰せ付けて下さるのであります。故に神樣の仰せである以上如何なる事でも、それを行へば必らず出來るのであります。所が人間と云ふものは勝手なもので、我身の上から思案したり我が家から思案を立てゝ、折角神樣の仰せ下された事でも、出來ない事無理な事の樣に思ふて、それを實行する事から避け樣とするのであります。





神樣は心の廣い御方でありますから、一度二度はそれでも大目に見て御許しになりますが、度重なつても其の心が改まらぬ時には、終いに神樣は御用を仰せ下さらない樣になるのであります。左樣なれば人間の方から、今度はいくら御用がしたいからと思ふても、神樣はおさせ下さらぬのであります。其の結果遂には何事もする事が出來なくなつてしもうのであります。

それと反對に神樣の仰せ下された事は出來る事だから、せいと仰せ下されたのであると思ふて、一心になつてそれを行つたら心らず出來るのであります。斯うして神樣の御用を果たして頂いたら、又た神樣は他の御用を命じ下さるのであります。その結果始めは三貫目のものより持力の無かつた者が、五貫目も六貫目もある重い物でも持つ力が出て來るのであります。左樣なれば心が成人したのでありまして、神樣も共に御喜び下さるのであります。

すれば神様は人間に如何して用を命じて下さるのであるかと云ふ事になつて來ますが、是れは其の人に對して最も理の深い人の口を借つて、神様が仰せ下さるのであります。卽ち敎會であれば會長とか、會長ならば更らに上級の會長とか、兎に角自分に對して理の重い人の云ふて下さるのが神命であつて、その云ふて下さる時が、其の人のそれを行はねばならぬ旬になるのであります。故に其の時に云ふて下さる事を行はずに置いたら、一年先か二年若しくば三年先には、必らず其の理が吹いて來て、嫌でも應でも其の通り行はねばならぬ樣な事が、出來て來るのであります。ですから其の時には一寸考へたら無理であると思はれる樣な事があつても、是れは神樣が自分に其の六ヶ敷い事を仕上げよと、仰せ下さるのであると思ふて、それを實行さして貰ふて行かねばなりません。

若し左樣せずして神樣の仰せは無理であるなどゝ思ふて、不足を出したり泣言を云たりして居たら、終には何にも神樣にさせて頂く事が出來なくなりますから、無理な事でも無理と思はず行ふて行かねばなりません。





□

往還道と云ふのは大道と云ふのと同じでありまして、多くの人が共に連れだつて通れる、極めて平坦な道を云ふのであります。山道や細い道と云ふのは通り惡い道でありますが、此の往還道は通りよい道でありますから、一寸考へたら怪俄などせない筈でありますが、却つて此の方に怪俄をする者が多いのであります。

何故かと申しますると小さい險しい道を通る時には、怪俄をしたり踏誤つてはならぬと云ふ心がありますから注意して居ります。從つて怪俄をしたり踏みあやまる事が少ないのでありますが、往還道へ出ますると其の心がゆるみますから、心に油斷がつひ出て來るのであります。

故に往還道は道そのものには怪俄する樣な危險はないのでありますが、心に油斷がありますから怪俄をするのであります。

是の事を人生の上に付いて考へましても、難儀をして居る時には、心が張切つて居りますから怪俄をせないので、それは角力を取たりなどして居る時には、少々倒れても怪俄をせない樣なものであります。所が其の難儀を通り越して、少しでも樂になると、すぐ人間の心に油斷が出來て來のであります。例へば商人が苦しんで居る間は、一心になつて働いて居りまするが、少しでも金が出來て來ると、心に油斷が出來て、それから不幸が續いて來る樣なものであります。

尙ほ是を御道の上から考へましても、單獨で布敎に出た時などは、心に間違の無い樣にと、何にかに心を付て、少しの埃も心に止ない樣にして居りますが、次第に信者でも出來て敎會でも頂く樣になつたら、何時とはなしに其の時の心は失つてしまひ、信徒は自分の云ふ事なら何んでも聞て呉れるもの〻如く思ふて、若し自分の心通りにならぬ者や言ふ事を聞かぬ者でもある





と、腹を立てたり不足を云ふ樣になるのであります。それがもう油斷が出來て居るのでありまして、それから不幸が出て來るのであります。

斯う云ふ譯でありますから、人間が通りよいと思ふて居る往還道は、實は通り悪いのでありまして、通り悪いと思ふて居る細い道が通り好いのであります。是を世上から考へましても、家に苦しみや難儀の掛つてゐた時は、身體も健康で內々も仲好く通れたのが、追々其の難儀がなくなつて來ると、家に病人の絶え間がないとか、不時が這入る樣になつたとか云ふ事を屢々聞く樣なものであります。

故に人間と云ふ者は不幸な時よりも幸せな時に、大いに心を注意して過失の無い樣に通らねばならんのであります。不幸の辛抱は仕易いが、幸せの辛抱が仕悪いのでありますから、其の幸福の中にあつて心に油斷の無い樣に、各自心を勤めて行かねばなりません。

□

此の道の人が私しは因縁の深い者でありますと云ふ場合には、多くは悪因縁と同じ様に用ひられて居るのでありますが、因縁とは必らずしも悪因縁ばかりに限られたものではありません。其の反對の善因縁の場合もあるのであります。そして其の因縁の上からは、此の道に因縁の深い者と云ふ意味であります。尚ほ此れを本部と云ふ上に付いて申しましたら、御教祖と深い因縁を持つて居る者と云ふ事になるのであります。

其所で今申した様に善い因縁を持つて、此の世に生れて來た者でも、若し其の人が自分は好い因縁の者であるからと云ふので、其の因縁を頼りとして、自分が勤めると云ふ事がなかつたら、折角の好い因縁の理も消えて行くと云ふのであります。

例へば今からずつと以前に本部に或る先生がありました。此の方は御教祖から人足社と云ふ





御言葉まで頂いて居られたのであります。人足社とは三人より無かつたのであります。所が此の方が明治廿七八年の頃に至つて、自分にも神懸があると云ふ事を云ひ出されたのであります。そして終ひには本部は火の屋敷であつて、自分の方は水の屋敷であると云ふので、自分で本席と號して、本部に對して反對する様な事をせられるに至つたのであります。其の結果本部から處分をせられたのであります。

若し此の方が今日まで間違つた事をせずに通つて居られたら、非常に德のある方でありますのに、自分の心から自分の德を破つてしまはれたのであります。又た或る方は神様が控柱とまで仰せになつて、今日まで居られたら結構な地位に座られるべき、身分のある方でありましたが、是れ亦自分の心から、此の道に逆ふて世界並に落ちて行かれたのであります。

斯様に道に深い因縁のある方々でも、其の因縁を思はず又た其の因縁を更らに良くして行くと云ふ事に、心を使はずに居られたならば、それは丁度ある德を喰ひつぶして居る様なもので

あります。世界でも座して喰へば山も空しうすると云ふ例への通り、日々に理を積んで行かなかつたら、次第に理が無くなつて行く道理であります。

以上は主として御本部の上から申したのでありますが、是れは御本部のみに限られた事ではありません。枝先に於きましても、父が此の道の爲めに盡して呉れた德に依つて其の子が生れて來て、其の後を繼いで居ると云ふのがあります。左樣した者はやはり日々に自分で理を積んで行かなければ、親の德ばかりにかまけて居て、自分が勤めると云ふ事がなかつたら、德敗けをして却つて苦しまねばならないのでありますから、大いに氣を附けなければなりません。

□

此の道に往還道は通り好いが、心に油斷するから通り惡いと云ふ事がありますが、其の反對





に細い道であつても、道一つの使ひ樣では怪俄する事もないと云はれて居るのであります。是れは要するに細い道や危い道は怪俄はしてはならん、落てはならんと云ふ心がありますから、一心になつて心が他に移らぬからであります。例へば細い針金の上を渡る事の出來るのも同じことであります。

斯樣考へて來ますると道の險しいとか困難とか、通りよいとか通り惡いとか云ふ事は、道その者にあるのではなくして、通る人の心一つにあると云ふ事になるのであります。昔し或る禪宗の僧侶が、武藝に非常に秀でた武士に對して、お前は此の丸太の上を渡れるかと、地上から一尺程離れた所へ置いて、武士に尋ねたのであります。所が武士はこんな事ぐらゐは平氣だと云ふので見て居る前で渡つて見せました。それで今度は僧侶が其の丸太を天主閣の上へ持つて行つて、やぐらかの窓から外へ突き出して、同じ丸太の木だから此の上を渡つて見よと云はれました。所が其の武士は如何しても其の上を渡れなかつたので、それは未だ修業が出來て居な

いと笑はれたと云ふ話があります。是れは同じ木でありますが、場所が異つた爲めに其の場所に囚はれて、心の平衡を失つたのであります。

御教祖は世界の人が此の道へ這入つて來るのは、丁度百間もある金の延金の橋を渡る樣なものである。金の橋と云へば誰れでも大丈夫と思ふて渡つて來るが、金と云ふものは柔らかいものであるから、中途まで來ると橋がぴよ〳〵して通れない。左樣なると人間の心が顚動して、其の爲めに深い淵に落ち込む者がある。然し其の時はよく心を定めよ、心を定めたら身が定まる、身が定まつたら橋が定まる、橋が定まつたら其橋を渡る事が出來ると仰せになりました。

是れ等もみな心一つ治まつたら好いのでありまして、其の心が定まらなかつたら、よし人が見て大丈夫と思ふ樣な所を通つて行つても、怪俄をせなければならんのであります。其所で心を定めると云ふのは、如何云ふ風に定めるのであるかと申しますと、それは如何なる事を見ても聞いても、それが爲めに心が他に移らん樣に定めるのであります。卽ち矢を弓につがへて





的に向つた時の樣な心を定めるのであります。

心を定めると云ふのは窮窟になる事でありますから、多くの人はそれを自分で仕樣とはしませんが、その心が定まらぬ以上は、心一つの理が治まつたと云ふ事が出來ません。從つて何時何時どんな事が出て來て、我が身が苦しみに落ちねばならんやら分らんのでありますから、確かな心を早やく定めて置がなければならないのであります。

□

神樣の御話と云ふのは神樣の思召しを人に傳へるのでありますから、唯單んに事柄を說明するだけでは足らんのであります。現在では此の神樣の思召しと、世界の道理とが往々一つになつて居る樣でありますが、本當の話と云ふのは、神樣の思召しを說くのであります。其所で神

様の思召しを說く以上、神様の御心持ちを聞く人の心に會得出來る樣にせなければ、事柄を明瞭にした處で、それで十分と云ふ事は出來ない。卽ち神様に對して好意を持ち、進んでは之れを慕ふ樣になる所まで、話は進めて行かなければならんのであります。

何故なら人に對して其の人を理解する事が出來ても、其の人に對して好意を持つ事が出來ないと云ふ樣な場合が、人間相互の間にも往々ある事であります。故に神様の御心を說明しても、その結果聞く人が神様の御心を信賴する樣にならなければ、折角の話も何んの役にも立たなくなるのであります、だから相手の人に味の出る所、卽ち興味を覺へる所まで、話を進めて行かなければならんと仰せられたのであります。

此の點から考へますると、早やく神様の御助を頂いた樣な人は、直ぐ此の道を信ずる樣になる筈でありますが、事實は仲々左樣は行かないのであります。何故ならあまり不思議な御助を頂くと、却つてそれを恐ろしがつて、信仰を止める樣な者が少なくないのであります。故に





御助けも大事であるが、それよりももつと大事な事は、よく人に神様の御心を說いて、心に其の理を味はすことであります。

それには一度や二度運んで話しただけではとても出來ません。何度も〳〵も同じ事でも繰り返へして話すから、少しづゝ悟れて來るのでありまして、それから今度は向ふから少しでも多く話を聞きたいと云ふ心になつて來るのであります。

左樣なれば話を聞くだけ心が眞實化されて行きますし、眞實化されて行く程、神様の御話が聞きたくなつて來るのであります。だから事柄を說明したり道理を說いたりする事よりも、此の神様の御心持ちを自分もよく會得して、それを人の心に移して行く樣にせなければならぬ。左樣すれば聞く人の心に味ひが出て來ます。物ならば喰べてみようと云ふ氣になるのでありますから、其所まで盡し運びをして行かなければならんのであります。それが出來なければ丁度肥を水に流してしもうも同じことになるのであります。

□

人間が自分の子を愛する場合に、蝶よ花よと云ふて愛するのであります。成程人間が自分の子を、蝶や花を愛する樣に心から、愛するのは最もな事でありますが、それならば子供の何處を愛して居るのであるかと云へば、是れは一寸には分り惡い、何故なら身體が可愛いのなら、若し其の子供が死んでしまふたら如何するか、如何に可愛い子供でも其の儘置いて置くと云ふ譯には行かない、土中へうづんでしまふか、火に燒いてしまはねばならぬのであります。して見れば子供の何處が可愛いのでありますか、それは生きて居るから可愛いのであります。死んでしまうたらどれだけ可愛い子だからと云ふても仕樣がないのであります。

左樣して見れば人間が子供を可愛がつて居るのは、其の子が生て居るからであつて、其の生





きて居ると云ふ事は、人間の力では如何もする事も出來ないのであります。何故なら子供を生んだのは親であるとしても、其の子の生命は親に依つて造られたものでないからであります。若し親に依つて出來たものならば、世界に子供を死なして悲しんで居る親が無い筈でありますが、事實左樣した人が澤山ある處から見ますると、是れは親の力では到底如何もならないのであります。

すれば生命は誰れが守護し與へられたのであるかと云へば、それは云ふ迄もなく神樣であります。神樣が人間の身の內に入り込んで、御守護下さるから人間は生きて行くことが出來るのであります。故に子供が生きて居ると云ふことも、之れは云ふ迄もなく神樣の御守護に依るのであります。

左樣すれば親が本當の意味に子を可愛がると云ふのは、其肉體を可愛がる樣ではならない。其の子の生命が一日でも長く存在する樣にしてやるのが、眞に子を可愛がることになるのであ

ります。それには親が神様の爲めに働くと云ふより無いのであります。

然るに多くの人の中には、自分は神様の爲めに働かして頂きたいと思ふて居るのであります

が、神様の爲めに働いたら、子供を教育する事が出來なくなるから、左樣は行かないと云ふ人

があります。是れは一應尤らしい考へでありまするが、然し是れは自分の力で子供は如何と

もなると考へて居る所に、大きい間違ひがあるのであります。

何故なら子供と云ふものは、自分が神樣から與へられて育てゝ居るのであつて、其の生命は

神樣が司つて居られるのであります。故に子供の德のあるだけは、神樣が自然に御與へなさ

るので、親の力を以つて如何ともする事が出來ない。然るに子供可愛いと思ふ結果、親が正し

い道を踏みあやまるから、子供の可愛いのは息一筋より外にはない、息は神の守護を待たねば

ならぬ事を明らかにせられたのであります。





□

人間と云ふものは何事をするにも多くは自分を中心として、それから考へて行くのであります。即ち自分の利益や不利益を心の内で考へて、物事を仕樣とするのであります。然しそれでは何時か困らねばならぬ時が出て來るから、何れも神樣の教へ通りの道に添ふて通らねばならぬ事になるのであります。從つて此の道は何事を考へるにも、自分の利益や不利益は少しも考へずに、それが神樣の思召しに適ふや否やと云ふ事のみを考へるのであります。

然し此の御道の人だからと云ふて、萬人が萬人必らずしも、左樣した心の人ばかりであると云ふ譯には行かない。何故なら一時は神樣の話を聞いて、左樣した澄んだ心になり得た事があつても、又た心に垢がたまつて、間違つた心使ひをする樣にならぬとも限らぬからであります。そこで左樣した人は、やはり神樣の思召し通りになつて行くと自分の利益にならぬとか、損

をするとか云ふ樣に考へて、神樣の思召しに添はぬ樣な心使ひをする樣になる。それを勝手の心と云ふのでありまして、尙ほ是れを平たく申しましたら、人間として使ひよい心とでも云ふたらよからうと思ひます。

所が斯うした勝手な心は神樣の思召しに添はぬのでありますから、天理として誰れも受取る人がありません。そこで其所へ道理を附け加へて來るのが、勝手の理に理をこしらへると云ふのであります。卽ち眞の心でない道理を添へて來るのであります。

例へば神樣の御話を聞かして頂いたら、如何しても自分を處置せなければならない樣なことがあると致します。所が誰れしも自分を處置する事は好みませんから、心の内では左樣せずに濟したいと云ふ勝手な心が出て來ます。けれども自分はそれは困るから、そんな事は出來ませんとは理として如何しても云へない。例へ難儀しても苦しんでも、それを處置するのが道である以上、左樣した勝手な事は云へない。其所で何んとかしてそれをせずに居たいと云ふ心から、





仕て出來ぬ事はないのでありますが、種々の道理を考へ出して來るのであります。そして其の道理を以つて自分がせなければならぬ事を、せぬ申譯と仕樣とするのであります。其の結果は却つて自分がより困らねばならぬ事が出て來るのでありますが、それが分らずに其の理を押し通すのであります。

斯樣に天の理に從はずに、自分の方から考へて、それに道理をつけて行くのが勝手の理に理をこしらへると云ふのであります。今日の學問などは多くは、此の勝手の理に理をつくる事を考へて居るのであります。それでは神樣の御心に添ふ事が出來ないのでありますから、左樣した勝手な心を出さぬ樣、況んやそれに道理を附け加へて、その道理を押し通す樣な事はせぬ樣にせなければなりません。それを此の道では申譯する樣では、道とは云へんと仰せられたのであります。

□

堅いのと柔らかいのと、急ぐのと急がぬのとは正反對の事であります。是れを一つの心ですると云ふ事は、左右へ同時に歩けと云はれるのと同じであつて、それは出來る事ではありません。すれば如何云ふ樣に是れは悟つたら好いかと申しますると、斯う考へたらば直ぐ分るのであります。卽ち此の道を通つて行くのには、心を堅うして通らねばならぬ時もあり、急いでせなければならぬ事もあれば、急いではならぬ事もあると云ふ事であります。

何故なれば、是れを布敎の場合に付いて考へましても、お助けをする相手の人が剛情であるのに、助ける人が剛情であつたら、それこそ二人の間に衝突が起つてしまひます。すれば助ける者は剛情では惡いかと申しますると、相手の人が心の柔い氣の優しい人であつたら、剛情な心を寫して助けて行かねばならぬので、此の場合には剛情なのは甚だ好いのであります。或





る先生が生前人が頑固だと評すのを聞がれて、頑固だ〳〵と云ふが頑固ならこそ、今日まで此の道に附いて來たのだ、頑固でなかつたら附いて來られるかと云はれた事があります。

又其の反對に、此の道は心を柔らか優しく、人と合せて行く道だからと云ふて、お助けに行つてお話を取次ぎもせず、相手の人の云ふ事ばかり聞いて、御尤もとばかりで心を合せて歸つたら、それこそ何をしに行つてゐるのか分らぬことになるのであります。然し斯うした場合には心を柔らく持つて通るのは好くないことでありますが、理のある人の云ふ所を聞いて、其の通りに守つて行く處から云へば、心の柔らかいのは懺悔も早やく出來ますから、好い心になるのであります。

又た物事に依れば事情を運ぶ上から、一時の餘裕もなしに急いでせなければ、折角の理が消えてしもふ場合もあります。難產の時などは一時間若しくば卅分と、時間を切つて御願ひせねばならぬのであります。又事情に依つては左樣急いで運んでは、却つて事情を誤らす樣な事も

ありますから、成るべく後れてから取扱ふ様にせなければならぬ時もあります。

是れを要するに、此の道を通るには自分の心を堅ふもやらこうも、急ぐ様にも急がぬ様にも自由にせなければならぬと云ふのであります。故に堅いばかりでも、柔らかいばかりでも、急いでばかりゐるのも、後れてばかりゐるのも好くないので、如何でも心が働く様にならなければならぬのであります。

何故なら、自由な神様の御働きを受け様と思へば、自分の心が自由にならなければならぬからであります。自分の心が一方に偏して居ては、一方に偏した神様の御守護より受けられないからであります。故に玉の如くなつて何方へでも自由自在に轉がる様に、心を持つて通らねばなりません。

□





此の屋敷は云ふ迄もなく、お地場の事を云ふのでありますが、此の屋敷から五色の光がさす日があると仰せられたことであります。五色の光とは如何なる光であるか、理を仰せられたものであるか、それとも事實左様した光がさす様な日が來るのであるか、今日からは分らぬのであります。

然し、御教祖が此の屋敷から五光が出ると仰せられた事があつて、其の後講社卽ち旭講の様なのが、五つ出來たと云ふ事を聞かして頂いた事があります。又た御光と云ふのは、人間に德が出來て人と行き違つた時に人が後を振り返つて見るから、その理を現して御光と云ふのやと仰せになつたとも云ひます。

斯うした點から考へましたら、五色の光と云ふても、何にも五色の光が屋敷からさすと云ふのではなく、左様した様に理が現れて來ると仰せられたものだと思ふのであります。卽ち年限

と共に此の道が世界の隅にまで行き渡つて、此のお地場の理が現れて來るのを、仰せられたのであらうと思はれます。

是れは私しが子供の頃からの事を考へましても、思ひ及ぶことでありますが、私しの子供の頃はお地場と云ふても未だ淋しいもので、本部の裏などは凡て竹藪で到る所田ばかりでありました。それが御教祖の十年祭の頃から各詰所が出來る樣になり、次第に發達して現在見るが如きお地場が現れて來たのであります。それだけお地場の理が光つて來たのであります。

故に今後五十年百年と經つて行く間には、どんな事が出て來るとも分らんのであります。御教祖はお地場の屋敷は八町四面と仰せになり、奈良初瀬七里の間は宿屋になると仰せられて置いたのでありますから、年と共に此お地場の理が重く光つて來るのは明らかな事であります。

神樣が五色の光がさすと仰せられたのは、左樣した道の盛んな日を仰せられたのであらうと思ひます。然し御教祖の御生れになつた時に、五彩の雲が現れたと云ふ事もあるのであります





から、或は左樣した光が差す日があるかも知れんのでありますが、それは事實と見るよりも理として見る方が適當であろうと思ひます。

尙ほ此の事に關しては、研究すべき餘地がある樣に思ひますが、兎に角お地場の理が次第に現れてお地場の德が世界の人の心に照り渡る樣になるのを、仰せられたと見れば大過なからうと思ひます。

□

普通の人間である以上、誰れでも出來る樣な事ならば、別段それは書き止めて置く必要はないのであります。普通の人では出來ぬ六ケ敷い事であるとか、困難な事であるとせられて居る事を、成し遂げるから後世まで記錄せられるのであります。それが古記若しくは功記でありま

して、それなくては人間として生れて來た甲斐がないのであります。

然し此の道は他の事をするのではありません。唯一つ眞の心になつて神樣の思召しに從ひ、それを實現して行く道でありますから、例へ武功があつたからとて、又文名があつたからとてそれが此の道の功記として傳へらるべきものではありません。此の道で後世まで傳へられるのは、自分がならん中から眞實の心になつて、神樣の思召しを實現する其の上に功がなければ、此の道の功とは云へないのであります。

御教祖が御歸幽になる前に、功記を作れと云ふ事を御急き込みになりました。是れは今日から考へますると御教祖の御通りになつた道筋を、記錄に書いて置けと仰せになつたものと思ふのであります。然るに其の當時の方は其所に氣が付かずに、こうきとは古き事だらうと云ふので、泥海古記を作り始められたのであります。然し其の方が直ぐ御出直しになつたので、それも出來ずにしまつたのであります。





御筆先にこうきは日本の寶やと仰せになつて居ります。是れは御教祖の如く眞實の心を、お持ちになつた方がなく、又た神樣の思召しを實現なさる上に、教祖程大きい功をお積になつた方はないのであります。それならこそ御教祖は此道の手本雛型と仰せられてあるのであります。

それは要するに、教祖は普通の人間では、到底出來ない道を通つて下されたからであります。そこで此の道を信仰する者は、此の教祖雛型の道を通るのでありますが、雛型と云ふても何にも其の通りの事をせなければならんと云ふのではありません。何故なら御教祖御在世の當時と今日とは、世界の事情が變つて居りますから、其通りの道を踏もうと云ふてもそれは出來ません。唯其の心を御教祖のお持になつた心通りにして、通つて行かねばならぬのであります。

斯うして自分の通つた理が効記になるのでありまするし、又た話の種になるのであります。如何に多くの話をしてもそれは、五分板に五分の釘を打つ樣なもので、千本打つてもきかぬが一寸の釘なら一本で止まる、其の一本の釘となるのは自分の通つた道でありますから、何んで

も人の出來ない事をさして貰ふて、こうきを各自に作らして頂かねばならぬのであります。

□

人の物やと思ふたら人の物になる。我が物やと思ふたら我が物になると云ふ神樣の、此の御言葉を唯表面のみに解してしもうたら、それこそ大變であります。何故なら我が物と思ふたら、我が物になるのであるから、人の物でも自分が我が物だと思ふたから、我が物であると云ふので默つて持て歸つたら、それこそ盜人であるからであります。然し神樣は何にも物質上の事に付いて仰せられたのではなく、是れは理の上に付いて仰せられたのでありますから早合點せぬ樣にせなければなりません。

其所で此の御言葉は神樣が仰せになつた、我が事と思ふたら我が事になる、人の事と思ふた





ら人の事になつてしもうと云ふ御言葉と同一の意味であります。即ち理の上に於いて、人の事だからと捨て置いて自分が進んでせなかつたらば、それは一寸考へたら樂で好い樣でありますが、其事に關する事情も分らなければ、左樣した時に人の心は如何なるのか、又た如何運べば神樣の思召しに遇ふのであるか知る事が出來ません。從つて其の事に關しては、一切無知になるのでありまして、それが人の物になつてしもうと仰せられた所であります。

所がそれに反して、例へ其の事が自分に何んの關係もないが、親切な心から我が事の樣に思ふて、その困難な事情の中へ飛び込んで事情を治めるとする。すれば人の事であつても、斯うした事情は斯う治めたら好いとか、斯う云ふ時には人の心と云ふものは如何なるものであるとか、又たは其の運び方は斯うすれば神樣の思召し通りになるとか云ふ事が、經驗せられるのであります。

事柄は人の事でありますから、事情が治まつてしもうたら人に歸さねばなりませんが、それ

が爲めに自分が經驗した心の知識と云ふものは、是れは返すに返す事が出來ません。すれば其の經驗と知識とは誰れのものに成るのであるかと云へば、それは其の事情を治めた人の物となるより外はないのでありますから、我が物となつてしもうのであります。

斯う云ふ譯でありますから、此の道に於いては自分に責任がないからとか、義務がないからとか云ふので、人の困つて居るのを見捨てる樣ではなりません。義務や責任があらうが無からうが、人が困つたり難儀して居たら、自ら進んでそれを自分の事の樣に思ふて運んでやらねばなりません。

是れは一寸考へたら馬鹿ばかしい損をする事の樣に思ひますが、それがやがて自分を助けるのであります。世界に今日は人の上明日は我が身と云ふ例のあります樣に、人の爲めに働いて置いた事が、經驗や智識になつて自分の上に不幸が降りかゝつて來た時に、それを容易に遁れる樣な道を付ける事が出來るのであります。故に人の事でも我が事と思ふてして置けば、それ





が後ちでは我が事となつて來るのであります。

□

此の世の中の事と云ふものは、自分の希望したり、目的とした事は多くは成就することが出來ないで、却つて自分が少しも思はなかつたり、考へたりした事の無い事が現れたり出來たりするものであります。例へば學生の身であるとしたら、大學へでも行つて大に學問を仕樣と思つて居たのが、家が思ふ樣に學資を出して呉れんとか、中途にして親を失ふとかして自分では望んで居なかつた、會社員になつてしもうと云ふ樣なものであります。又商賣で云へば大いに金を儲けたいと思ふて、働いて居たのに病氣になつて思ふ樣に、働きが出來ないとか、左樣した思ひとは反對の結果が往々にして現れて來るものであります。

斯樣に人間の思ひと、反對の結果が現れて來のは、如何云ふ譯であるかと申しますると、それは要するに自分と云ふ事を知らぬからであります。何故なら神樣の心通りの守護と仰せられて、心通りの理をお現はしになるのでありますが、思ひ通りの守護と云ふ事は、仰せになつて居りません。所が人間は自分の心と云ふものを知らないから、思ひばかりに心を走らせて、心通りになつたら、思ふ事と違ふと云ふて居るのであります。

然らば思ひと心とは如何違ふのであるかと申しますると、是れは丁度水と波との異ひの樣なものであります。思ひと云ふ方は、心が或る物に動かされて起つて來るのでありまして、心と云ふ方は動かぬ方であります。そこで神樣は心通りの守護をなされて居て、思ひ通りの守護をなされませんから、思ふ事と現れて來る事と常に反對の結果になるのであります。

更らに尙ほ一歩進めて何故人間は希望を有するのであるかと、尋ねまするとと斯う云ふ事が云はれるのであります。それはその事の出來ないのを人間の心が知つて居るからだと云ふ事であ





ります。何故なら人間が望む事は多くは自分では出來ない事であります。自分で出來る事なら何にも望んで、それを得るに苦勞する必要がないのであります。それが得られぬから、得ようと苦勞するので卽ち是れを御道の上から云へば、自分の德がないから望むのであります。それ故その事は失敗に終るのは當然であります。

故に人間は如何なる場合にも、自分の心と云ふものをよく見分けて事をせなければならぬのであります。自分の心とは或る意味に於いて、自分の因緣を自覺すると云ふ事にもなるのでありますが、要するに正しう自分を見て、それから物事に處して行かなければならぬのであります。

□

御教祖を警察が呼びに來た時、呼びに來るのも神、出て來るのも神と仰せられたのであります。普通の人から考へましたならば、御教祖が人を助ける爲めに、眞實の道を通つてお居でになるのに、警察が呼びに來たり監獄へ入れたりする事は、非常に惡るい事の樣に思はれまするが、教祖は左樣思し召して御居でにならなかつた。何故なら此の世で出來る事は皆な神樣のなさる事だからであります。

そこで警察が呼びに來るのも皆神がさして居るのだと仰せになつた。すれば何故神樣は御教祖の樣な方に左樣云ふ事をなさるのであるかと申せば、それは教祖に光を出す爲であります、何故なら如何に好い鐘があつても、それを打たねば響が現れぬ如く、御教祖の眞實が如何に尊いものであつてもそれは、機會が無ければ現れぬからであります。それ故御教祖は監獄へ御出でになる時には、谷底へ匂ひ掛けに行くと仰せられて、呼びに來た巡査を待たして、衣物を着替へ食事をして、さあ行きましようと平然としてお出でになつたのであります。





そして御教祖は斯う仰せになつて居りました。それは若し本當の心から、此の道を止めに來る者があつたら息の根が止まつてしもう、あの人等はお上の命令で來て居るのであるから、障りないのやと仰せになつて居たと云ふのであります。然しそれが御教祖の御德に光彩を出すのであつて、それで是れを節と云はれたのであります。

其の節を御教祖はいつも喜び勇んで、御通りになりましたから、其の節毎に新しい芽が吹いて來たのであります。それは御教祖が監獄から御出ましになる度毎に、出迎の人が增して行つて、最後に御歸りの時などは人力車が、二百臺から續いたと云ふ事であります。

斯う云ふ所から考へますると、世界から此の道に反對して來たのも、やはり神樣が道を盛ならしめる爲の方便として、反對おさしになつたのであります。是れを個人的に考へましても、反對のある時は心が張り切つて居りまするが、相手がなくなれば共に心が倒れます。それで心の倒れぬ樣にと云ふ神樣の御慈悲から、苦しみを與へて下さるのでありますから、御教祖の場

合に於いても、御教祖が御苦勞下されて、それで多くの者を御助け下されたのであります。故に唯其の事柄ばかりを知つて、深い神様の思召しを伺はずに居たならば、時に大きい間違ひがないとも云はれませんから注意せなければなりません。

□

人間が難儀をしたり、病氣になるのは天理に背いた心使ひをするからであります。從つて其の難儀なり、病氣なりから助けて頂こうと思へば、自分の心使ひを天理に從ふて使ふ様にして行かねばなりません。其の天理に從ふ心の重いか輕いかに依つて、助かる理にも早い遲ひの理が出て來るのであります。

是れを例へて申しましたら、度量の様なものであります。一方を重くしたらば片一方の方が





輕くなるし、輕い方を重くすれば又一方の方が輕くなると云ふ様なものであります。一方卽ち人間心と、一方卽ち天の理と何れを重く取るかに依つて、助かる理に相違が出來て來るのであります。

斯う云ふ譯でありますから、何るべく人間心を使はない様にして、天の理に從ふて行かなければならんのであります。が天の理を聞かして頂いて、成程人間と云ふものは我が身を土臺にして考へたり、人間の道理を基として考へては間違つてゐる。神様の仰せ通りになつて通るのが人間としての、正しい道の通り方であると云ふ様に、理を聞き分けた上から、自分の心を定めて來るのなら、眞實でありまするが、左様でない人があります。それは如何云ふのであるかと申しますと、天の理を聞き分けると云ふ事をせないで、病氣がつらいとか事情が治まらん所から、何んでも此の病氣が助かりたいからとか、事情が治まる様にとか云ふ心から、眞實の心を定める人があるのであります。

此の二つの心定めは一見した所同じ樣でありますが、其の動機に於いて非常な違ひがあるのであります。從つて神樣は前者に對して直ぐに御守護をお見せ下されますが、後者に對しては容易に御守護がないのです。

是れは要するに理を重くして、其の理を運んで行つたら身が輕くなる、卽ち病氣でも助かつて行くのでありまして、一方は身を重く取つて、理を輕くしているから我が身の病氣が重くなつて行くのであります。斯う云ふ譯でありますから、此の道に於いては理と云ふのは非常に重んぜられて居るのでありまして、神樣も又た理と云ふのは重く取れば、どれだけ働くとも分らんと仰せになつて居るのであります。

所が此の理と云ふのは姿がないので、一寸分らぬ所から理の吹ふて居る人に對して勝手な事を云ふたり、又は理を踏み破つて何んとも思はずに居る人が澤山あるのであります。然し自分の心が眞實であつたら、神樣は如何なる理も御見せ下さるのであります。すれば天理を重んず





ると共に、天理を踏んで通る樣にすれば、其の理が働いて助からぬ所でも助かる樣になるのであります。

□

此の御道の人々が一心になつて、働くのは誰れの爲めであるかと云へば、それは云ふ迄もなく神樣の爲めに働くのであります。すれば如何なる事を働いても、それが神樣の思召しに適はねばならんので、若しその事が神樣の思召に適ふて居なかつたならば、折角一心になつて働いても、それは何んの甲斐もない、無駄なことになつてしもうのであります。

所が多くの人の中には斯うした事をしている人が澤山あるのであります。それはよく神樣の思召しのある所も、神樣が今如何云ふ事を仕樣と思召して御座るのであるか、左樣した事は少

しも聞かないで、自分が勝手に考へて、是れは好い事だからやると云ふので如何にも熱心にやつて居られる人があるのであります。斯うした方は人間の一面から見たらば非常に熱心でもあり、且つ眞面目でありますから、道の爲めになる樣に考へますが、神樣の御心になつて考へたら、それこそ大變な違ひになるのであります。

是れを例へて申しましたら。神樣が今田植させなければならぬと思召して居られるとする。又時候も其の時になつて居るのに、神樣の思召や時候を見ずして、肥を置くのは好い事でもあるからと云ふので熱心に肥を置いてまはつたら、其の結果は却つて反對の結果を見る事になるのであります。斯樣な事をして居たらいくら熱心だからとて、何んの役にも立たんのであります。

又此の道は神樣の御思召しを取次ぐのでありますから、取次ぎをする時には成るべく自分の意見や、解釋などをせない樣にして、唯其の儘に取り次ぎをせなければならんのであります。





然るに自分の考へで是れは好い事だと思つたからとて、神樣の事を捨て置いて、自分の說くべき事のみを說いて居たなら、それは取次ぎにならないのであります。從つてその話には天の理が添ひませんから、話だけの事になつて助かる事はなくなるのであります。

斯う云ふ譯でありますから、先づ第一に神樣の思召しのある所を聞かして頂かねばならんのであります。それを神が一つ話し人間がそれを果たすと仰せになつて居ります。故に先づ神樣の思召しが今如何云ふ所にあるかと云ふ事を、何より明らかにして置かねばなりませぬ。

神樣の思召しが分つたらそれから、自分の働くべき道が分つて來るのであります。斯うして働いたら決して神樣と心を離して働くのでありませんから、神樣のお心にも適へば、人間が働く上に理を添へて下さるのであります。これでこそ神樣と人間とが共に働いて居るので、卽ち人間が神樣の御手傳ひをして居るのでありますから、其の理は皆な神樣が御受取り下さるのであります。故に成るべく我身勝手な考へや判斷から何事もせぬ樣にせなければなりません。

□

如何ほど廣い場所があつても、それを其儘にして置いては何んの役にも立ぬのであります。人間が其の土地を開墾して田地となし、種を蒔いて修理肥をして行けば人間の爲めになる、五穀を收穫する事が出來るやうになるのであります。然るにそれを捨て置くと云ふのは、田地になるものを遊ばして置くのと同じで、それは草山になるより仕方がないのであります。

以上は一つの譬へとして云はれたのでありまして、是れを人生の上に取つて考へたなら斯うなるのであります。卽ちお道を開かぬ人々が廣い場所であつて、其の廣い場所があつても捨て置いたら、草山になるより仕方がないのでありますから、早く開墾せなければならない。それを開墾するのが此道を擴めるのであつて、卽ち世界並の人々の心は、恰も草山の如きもので





あるから、教理に依つてそれを開き、そして其の心に眞實の種を蒔くのであります。

左樣して日々に修理したり肥をしたりしている內に、美くしい花も咲き實も結ぶ樣になるのであります。そして其の實は人間の爲めになるので、それは云ふ迄もなく草山を開いて、修理し肥した者の收獲となつて來るのであります。卽ち神樣の仰せられる修理して、育てあげてこそ我物であると云ふ通りになるのであります。

所が實際の上に付いて考へて見まする與、未だ此の道は發展したと申しましても、世界の廣い點から考へましたら、ほんの僅かであります。開墾すべき草山が到る所にあるのでありまして、神樣も世界では此の道の付いて來るのを、手を打つて待つて居る所があると仰せになつて居ります。故にお道の者は未だ〳〵心で安心して居てはならんので、大いに奮發して世界一列を踏みならす爲めに、此の開墾事業に從はねばなりません。

けれども更らに顧みて考へて見まする與、世界の人々の心が草山であるは云ふ迄もありませ

んが、此の道の者の心は如何であろうか、神様は草が繁りて道知れずと、御筆先に仰せになつて居ります。是は人間の心が誠の道を通らんから其の心に草が生へて、何れが眞の道やら分らなくなつたのを仰せられたのであります。我々自身の心の内に斯うした事は無かろうか、是が何より先決問題であります。何故なら自分の心が草山であつては、他人の心の草山を如何する事も出來ないからでありよす。

そこで自分の心を顧みて、自分の心には草などが生へて居ないと自信の出來て居る者は、別段申す事もありませんが、若し我が心に草が生えて居るのに氣付いた者は、先づ自分の心の修理を先にせなければなりません。そして又た其所に種を蒔て、眞實の實を得て置かなければなりません。何故なら自分の通つた道でなければ、人を案内する事が出來ないからであります。卽ち自分の通つた通りの道を、付いて來る者が必らず通つて來るものだからであります。





□

凡そ水車が轉ると云ふのは云ふ迄もなく水をかけるからで、水が流れてこなかつたら水車も止まつてしもうのであります。車が止まつたら其の働きが止まるので、從つて米つきとか粉ひきとか云ふ仕事が出來なくなる道理であります。すれば人間の心もそれと同じで、動いて居たならば何にか仕事が出來て行くが、動かなんだら仕事は出來ないのであります。

それでは心の車を廻す所の水とは何んであるかと云ふと、それは他人の心であります、是れを實際の上に附て考へまするとと、人間の心が最も活潑に働くのは、自分の心を知つて居て呉れる者の爲めに働く時であります。卽ち是れを云ひかへれば、自分が働いてもそれだけ見て呉れない人の爲には、如何しても一心になつて働けないが、自分を理解し其の働きを見て呉れる人の爲には、如何なる苦勞でも辭せないものであります。故に人間の心の水車は、他人の心卽ち

自分を知つて呉れる人の心に依つて廻されるのであります。

右の樣な譯でありますから、若し自分を理解して呉れる人がなかつたならば、それは水車から水を取つた樣なもので車も廻らなければ、從つて仕事も出來て行かないのであります。是れを敎會などの上に付て考へますると、敎會の會長と役員の心が合はなんだら、役員の心が働いて來ません。從つて水車の水をはづした樣なもので、少しの仕事も出來なくなり、敎會は自然に衰へて行くより外になくなるのであります。

更に是れを小さく、一軒の家に付いて考へましても、夫婦の間に於いて心が合はなんだら、やはり車の止まつて居るのも同じであつて、心が不愉快でありますから、家業が少しも發達して行きません。それで日々不足を云ふて暮す樣になつて來るのであります。

斯う云ふ譯でありますから、自分の心を日々愉快に持ち、面白く働いて行こうと思へば、人々の心と自分の心と合はす樣にして行かねばならんのであります。心を合してさへ行けば、す





る事、爲す事皆理解して貰へるから、其の仕事の仕榮へがある道理で、又た進んでそれをやる心になります。斯うして日々理を積んで行つたら、それは皆な最後に於いて自分のものになるのでありますから、水車の廻る樣にそしてその水の絶えん樣に、人と心を合せて行かなければなりません。

□

此の道に於いて神樣と云ふ事は、種々に說かれて居るのであります。例へば月日が神であるとも云はれ、火水風が一の神とも、眞が神であるとも、又た理が神であるとも說明されて居ります。是れは要するに此の道を聞く人の機根に應じて、神樣がよく分る樣に御說き下されたものであろうと思ふのであります。

所が此の御言葉の様な説明、即ち一つの心の理をよせて神と云ふと云ふ様な説明は、殆んど他に見られぬのであります。從つて此の御言葉はよほど研究すべきものであろうと思ひます。

其所で一つの心の理をよせると云ふ事でありますが、是れは平たく云ば、一致した心を持つたのを云ふのであろうと思はれます。是れを個人的に申しましたら、人間の心と云ふものは日夜に色々に働くものであります。然し色々には働きまするが、其の根本となる所のものは一つか二つかであります。それは無論時に依れば分岐に分れる事がありまするが、それは何か出來事に接した場合で、大低は二つほどであります。即ち否定するか肯定するかの二つであります。所が斯様に二つの心を持つて居ると云ふことは、人間が迷ふて居るのであります。此の迷ふて居る間は神様の御働きはないのでありまして、善悪に拘らずその一つに定た時、始めて神様の御働きが見えて來るのであります。

そこで一つの心の理と云ふのは、即ち此の一つの心になつた時を云ふのであろうと思ひま





す。尚ほ之れを他の事で申しましたら、人間が何かの事に一心になつて働いて居る時、其所に神様の御守護が添ふのでありますから、人間の一面から考へましたら、此の一心の時が即ち神様と同じ事になるのであります。故に心を一つによせると云ことは、そのことが神様であると云ふことも出來るのであります。

次ぎに是を家族や教會等の團體の上から見ましても、其の團體に屬している人々の心が、一つの心に理を寄せて來たならば、其所に天の理が働くのであります。如何に神様に熱心になつて祈つた所で、其の内の人々が皆我儘勝手な心使ひをして居る様では、神様は何の心に御守護して好いのか分らぬ事になります。從つて神様の御守護は現はれて來ないのであります。

然るに十人の人が集まろうが百千の人が集まろうが、其の人々の心が一致して居たらば、神様は直ちに御守護せられるのであります。從つて心の寄つた揃ふたと云ふことが團體の上に、神様の御働きを受ける道でありますから、即ちそれが神様も同じことになるのであります。そ

れで一つの心の理をよせて神と云ふと仰せになつたのであります。

□

神様の御心が働いて來るのは理として現はれて來るのでありますが、それが天然自然の理であります。天然自然と云ふのは日々月々年々の理が自然の理でありまして、是ればかりは人間の如何ともする事の出來ないものであります。又た人間が如何に考へても、其の身それ自身が、此の自然の理の支配を受けて居るのでありますから如何とも出來ない。例へばどれだけ賢い人であつても、自分は一つ〳〵年を取るのは馬鹿らしいから、毎年二つ宛年を取つて行こうと云ふた所で、是れは出來るものではありません。又夏は暑くて困るから是れは涼しくしてやろうと如何に考へたとて、それは出來る事ではありません。それ故人間は如何しても、此の天然自





然の理に從ふて行かなければ、其の生存を全ふする事が出來ないのであります。

然し眼に見えた自然現象の上に現はれる天理に付いては、誰れしも反抗する樣な事はせないのでありますが、それが一歩深く精神界へはいつて來すと、其所にも同じ樣に自然の理が支配して居るのでありますが、其の自然の理に從はない者が出來て來るのであります。其の心が此の道では人間心と云ふのであります。

それでは人間心と云ふのは如何云ふのであるかと申しますると、それは自分と云ものを中心として、何事に拘らず考へて行く心であります。然しそれも眞實の心から考へて行くなら未だ好いのでありますが、多くは自分の利益不利益と云ふ樣な、利己的な考へから來るであります。從つて其の心と自然の理とが何處かで鉢合せをするに到るのでありまして、卽ち天理から離れた心になるのであります。

天理と自分の心との間に隙が出來て來たら、其れは丁度根の無い木と同じことで、何時か枯

れる時が來なければならんのであります。然し多くの人は左樣した方面の事は少しも考へないで、唯先へ〳〵と進んで行こうとします。そして人間は自惚れて何んでも此の世は自分の思ふ樣になるものだと云ふ樣な。大膽な心になつて更らに天理にはづれた事ばかり行ふて、それで何んとも思はない樣になるのであります。

然し左樣した者のみが此世に現はれて來たならば、此の世の治まりは付かなくなるのであります。それで自然に根から枯て來る樣に、一時は榮えて居ても何時とはなしに衰へて、終には枯れるに至るのであります。所が天然の理に從ふて居る者は根のあるのと同じで、其の進歩は遲い樣でありまるすが、それには枯れると云ふ樣な事がありませんから、却つて最後の幸福を受けられるのでありますから、それが却つて安全なものであります。それを一つも踏みかぶりないと仰せられたのであります。





□

神樣の道は理の道でありますから、理に變りの無い樣に、此の道に變りのありそうな筈はないのであります。所が此所には道改めにやならんとありますので、一寸考へたら道が變るのではないかと、思ふ人があるかも知れませんが、何も道そのものが變ると云ふ意味ではありませぬ。すれば何が變るのであるかと申しましたら、それは道の現はれ方が變つて來ると云ふのであります。例へば同じ天然自然の理でも春と秋とは、其の現はれ方の異ふ樣に其の時々の理があるのであります。

尙ほ是れを人々の上に付て考へましたら、お互ひに此の世に生れて來た時から、今日まで生長して來た迄の間に、自分と云ふものは少しも變つて居ないのであります。然し子供の時には子供の衣物を着て居たし、少年になつた時は少年の着物を着、成人してからは成人した樣な着

物を着て來たのであります。是れが衣物を改めたと云ふのでありまして、お道を改めると云ふても丁度是れと同じことで、道そのものを改めると云ふのではなく、道の表現の仕方が異つて來ると云ふのであります。

尙ほ是れを教理の上から考へましても、御教祖は大和國の方でありましたから、其の御言葉は大和地方の俗語を用ひて御話し下されたのであります。然し此の道が次第に擴まつて外國へ傳はつて行つたら、又た外國の言葉を以て教を說かなければ、人に道を傳へる事が出來ない。是れも同じで道は變らぬのであるが、其の表現が變つて來るのであります。

尙ほ是れを布教の上に付いて考へましたら、始めて單獨で布教に行つた時は、難義苦勞をせなければならぬのであるから、出來るだけ我が身を修めて行かなければならぬ。從つて日々の生活も、不自由をして出來るだけ苦勞の道を通らして頂かねばならぬのであります。所が相當に信者が出來て、教會でも設置させて貰ふたら、今度は教會を見苦しくない程度にして置なけ





ればならない。何故なら是れは自分の教會でなく、神樣の教會であるからであります。又た布教などに付ても、單獨で布教して居た場合と、大いに其の趣が異ふて來るのであります。從つて其の邊に付いても大いに考へて行かなければなりません。

先日或る宣教所の所長が病氣になつて居のを、私しはあまり布教に出るから、參つて來た人が不足を付けて歸るから、それが神樣を思召に適はないのだから、今度はお助けは人に任せて置いて、成るべく教會に座つて居る樣にと諭したのでありますが、是れが其の時々の理卽ち神樣の思召しに添ふて行くと云ふ事であります。

尙ほ是れをよく分る樣に申せば、自分一人が信仰して居る時と、多くの信徒を持て、それを導きながら信仰して行くのと、又た多くの教會を持つてそれを治めながら信仰して行くのと、其所に心の用ひ方の異ひがあるのでありますから、其の時々に理を改めて行かねばならぬと云ふことであります。

□

大恩と云ふのは神様の恩の事を云ふのでありまして、小恩とは人間の恩を云ふのであります。何故神様の恩が大恩で、人間の恩は小恩かと申しますると、人間の恩は如何に重い恩だからと云ふて、それが無かつたならば人間が死ぬと云ふ様な事はありません。例へば世界で大恩と云はれて居る父母の恩、又は師の恩とか云ふのは、成る程深い恩には相違ありません。けれども世界で云ふ様に、親が無くとも子が育つと云ふ道理で、親がないからと云てそれで人が死ぬものでもありません。又師の恩や其の他世話になつた恩やと云ふものは、恩は恩には相違ないが、それが無からと云ふて、人は死ぬと云ふ様な事は少しもないのであります。それ故に是れ等人間相互の上の恩を小恩と云ふのであります。





然るに神様の恩は如何であるかと云ふに、神様は人間を宿し込み、又た生れ出るのにも御世話下されたのでありますが、之れは生れる以前の事として、生れてから以後に致しましても、日々〳〵人間の身の内に入り込んで、温み水氣の御守護から出る息引く息、皆神様が御世話下さるのであります。故に若し神様の御守護がたとへ一分間でも止まつたならば、人間は直ちに死んでしまはねばならぬのであります。

斯くの如く神様の恩は日々〳〵で大きいのでありまするが、あまり大きいから却つて人間は、其の有難味を知らぬのであります。從つて恩を送ると云ふても、此の大きい恩に報ひると云ふ人はなく、小さい人間的の恩を大きい恩の様に思ふて、それを送つてばかり居るのであります。

此の道は即ち此の神様の御守護を聞かして頂き、其の御恩の大きく深いのを知らして頂いて、其の御恩に報ひさして貰ふ道なのであります。と云ふて小さい恩を送るのは、全然不必要の事であるかと云へば、左様ではありません。是れも人間が此の世に住んでいる以上は、是非送ら

なければならんのでありますが、それよりも此の神様の大恩を重く見ると云ふのであります。そしてそれに報じて行くのであります。

故に人に教を説く者は、先づ自分が此の大恩を深く感じて居なければ、其の御恩を説く事が出來ないのであります。其の恩を自分が深く感じて居たならば、自然それが言葉に現はれて、人々に神様の御恩を感じさす事が出來るのであります。そして其の大恩に報ひさして頂いて行くのが此の道でありますから、此の道を又た恩報じの道とも云ふのであります。

□

踏張ると云ふのは、重い物を荷ふたりする時に云ふ言葉であります。すれば踏張ると云ふ事の裏には苦しい事とか、重い事とか通り悪い事とかゞあると云ふ事は明らかであります。そし





て是れは如何なる困難なことがあつても、それに心を倒さずにふつばつて働くと云ふ事が天の理、即ち神様の思召にかなふと云ふ事になるのであります。

何故なら苦しみや困る事と云ふのは、一寸考へたら何か悪い事の様に思ふのでありますが、是れは左様取るのが間違つて居るのであります。何故なら慈悲であらせられる神様が、人間に苦しみを考へられると云ふ様なことは無いからであります。すれば其の苦しみは何んの爲めであるかと申しますると、それは人間を向上せしめたいと神様が思し召されるからであります。何故なら人間と云ふものは苦しみに打ち勝つて進む程、其の心が進むものであるからであります。

故に世界並の人なら、苦しみを逃げやうとするのでありまするが、お道の人はむしろ苦しみを迎へるのであります。それは苦しみが十のものなら、自分の心が二十であつたら、其の苦しみは何んの苦しみも與へない筈であるから、大きい苦しみを受ける程、自分が進むことが出來

るから、苦しみを以つて自分が進む階段と見て居るのであります。

然るに一般の世界の人は左様云ふ風に考へませんから、苦しみが出て來たなら直ぐ其の苦しみに敗けてしもうて心を倒してしもうのであります。所が神様は親でありますから、左様重い堪えられない様なものをお與へになるのではなく、其の人相應の苦しみを與へて居られるのでありますから、心さへ確り持つて居たら必らず其所は通れるのであります。然るに其の事が分りませんから、少しの苦しみでも大きい苦しみの様に思ふて、其の心を倒してしもうのであります。

神様は心通りの守護をせられるのでありますから、斯く人間が心を倒してしもうたら、心通りの守護をするより外はありません。左様なれば苦しい上に尙ほ苦しい事が廻つて來ますから、終ひには再たび起き上がる事さへ出來ない様な苦境に陷るのであります。だから左様云ふ時に心を倒さぬ様にして行かなければなりません。





斯う云ふ譯でありますから御筆先に於て、神がふんばるから承知して居よと仰せになつて居ります。即ち神様も踏張つて下さるのでありますから、其の心に添ふて人間もふんばつて行つたら、必らず其の心にのつて神様が御働き下されて、其の苦しみを取つて下さるのであります。そして左様した苦しい時や困つた時に、普通ならば心を倒すのであるが、其所を心を倒さずに踏張つて行くのが天の理、即ち此の道であると仰せられたのであります。

□

人間の心の理を云ふものは、たとへ千里二千里隔たつて居ても、其の心は通ふものであると云ふ事は明らかなことであります。然し通ふと云ふても誰れにでも通ふと云ふのではありません。道がなければ通れん様に、通ふだけの理のない人には通はれぬのであります。理さへあれ

ば千里でも二千里でも其の儘通ふて行くのであります。

其所で心の理を運ぶと云ふのは、卽ち懺悔ならば出來るだけの懺悔、盡しならば出來るだけの盡し、運びならば出來るだけの運びをするのであります。左樣したならば必らず其の理が通ふて行つて、相手の人の心にそれだけの理が現れて來るのであります。

私しの友人が或る時或る人の所へ布敎に行つた。そしてよく聞いて見ると其の人が、他の人に金を貸して置いたのである。所が其の後請求しても如何しても歸さない。それを苦に病んで病氣になつたのであります。其の事が分りましたので友人はそれは前生借つて置いたものか、又は自分の身に付かない金であるから、それを取ろうと思ふても思ふ樣にならんのが理である故にそれを病んで病氣になつて居ては、苦しみの上の苦しみを重ねて居る樣なものであるから今日限り其の金は落したと思ふか無かつた金であると思ふて、取ろう〳〵と思ふた其の心を懺悔する樣に申したのであります。すると其の人も聞分けのよい人と見えて、其所で今迄自分が





取り返さうと思ふて居たのは、惡るかつたと分つたので懺悔したのであります。

所が丁度私しの友人が其の人に話をして居るのと同時刻に、借りて居る人の所へ人が來て色〻話の中から、人に金を借りて返さぬと云ふのは甚だ惡い事である。借つて居る金なら直ぐ返さねばならぬと忠告して居たのであります。

私しの友人が病人の所から歸ると、直ぐ後かの其の人が來て、長らく借つて濟まなかつたと云ふて返へしに來たと云ふのであります。斯樣に理と云ふものは鮮やかなものであります。

斯う云ふ譯でありますから、千里二千里隔れて居ても、若し其の人と仲が惡かつたら、其の人の事を思ふ毎に不愉快な心持にならねばなりません。それは丁度梅雨の時のやうなものであります。所が神樣の御話を聞いて、人の事を惡るく思ふのは惡るい事であると云ふのに氣が付いて懺悔をしたならば、それが神樣の御心に通ふたら必らず喜びが湧いて來ます。すれば其の理が又た先方へ通つて、先方の人の心にも知らず〳〵、懺悔の心が湧いて來るのであります。

斯うして心が通ふ樣になれば、今迄梅雨が降り續いて居たのが照れ渡つた樣に、始めて心からの喜びが相方に出て來るのであります。それ故に一人の心で眞の理を運んだならば、それが基になつて、凡ての人と和解が出來て來るから、之れを十分に日が照ると仰せられたのであります。

□

人間と云ふものは其の生活さへ安らかであつたら、喜んで通れるもの丶樣に思ふものでありますが、事實は是と反對であります。近年成金が澤山出來て、物質的な快樂を慾にして居りまするが、其の人等は果たして樂んで暮して居るでせうか。外部から見たならば、それは人を羨やませる樣な生活振りを致して居りまするが、其の心に一歩深くはいつて見たらば、實は非





常に淋しい心持で暮して居るのであります。要するに面白い事を欲すると云ふのは、其の心の寂寞をごまかさんが爲めに外ならないのであります。

東京に斯う云ふ人がありました。其の人は東京中のうまい物は必らず取り寄せて喰ふのが癖でありました。所が其の人の云ふには東京には少しもうまい物がないと云ふのであります。是れはあまり喰ひ過ぎてしもうたから、うまい物が無くなつたのであります。

斯樣に人間も樂な暮しばかりして居ると、却つて其の心が淋しくなるものであります。故に羨やまれる樣な人程、其の心の中は淋しみや苦しみに滿たされて居るのであります。

それに引かへ日々の生活が非常に苦しい生活をして居る人は、一見甚だ氣の毒の樣に思はれまするが、心の内は却つて喜びが多いのであります。私しは先月の始めに保津川を下りましたが、其の川は奇巖が續出していて、舟が辛うじて通る樣な危險な所が澤山あるのであります。其の川を舟で下るのは一面危險でありまするが、その危險が面白いのであります。是れが平々

凡々な大きな川を下るのなら、何んの趣味もあつたものではありません。それから考へましても、一寸見て通り悪い様な所を通ると云ふのが、心を喜ばせるのであります。

是れを人生の上に移して考へましても、何んの變化もなく食ふに困らず遊んで暮せると云ふ様な人は、一寸考へたら幸福の様に思はれますが、心の内から考へましたら甚だ不幸な人と云はねばなりません。故に種々變化のある道を通つて、人から見て氣の毒だと思はれる様な道を通るのが、神様の目から見れば非常に好く行つて居るのであります。

例へば一杯の御飯にした所が、食ふに困らずして喰つたら何んの價値もありませんが、明日喰ふ米が無いと云ふ様な中から、一杯の御飯を食べると云ことは、どれだけ有難く思へるか分らないのであります。

此の道の人は皆な神様に恁れて通つて行くのでありますから、明日の日は如何なるやら分らないのであります。世界の人が非常に危險の様に思ふのは、是れは尤もであります。然し左様





した不自由な中を通る間に、道以外の人には分らん所の樂しみが心にあるのであります。故に心の樂しみを求めて、眼に見えた事の樂しみを求めない様にせなければなりません。

□

人間の言葉と云ふものは、聞た暫らくの間は覺へてゐる事が出來ますが、暫らく過ぎると皆忘れてしまうものであります。たゞ其中で深く印象せられた事は覺えて居るものであります。然しそれも忘れる時がありますが、話されたと云ふ事實は何時迄たつても、記憶から消て行かないものであります。

私しは十八歳の時、東京の東京座で西洋の有名な人の講演を聞いた事があります。今其時の事を考へ出てみましても、其の人が如何云ふ事を云ふたのやら、殆んど忘れてしまつて居りま

す。所が其の時の樣子などは未だに鮮やかに殘つて居ります。

斯樣に人の言葉と云ふものは、日が經つと共に忘れてしまうものでありますから、其の場だけのものと仰せられたのであります。そこで言葉の理をこしらへなければならないと云ふのでありますが、言葉の理とは何んであるかと云ふと、要するに人格を造れと云ふことになるのであります。

私しが未だに其の西洋人の事を忘れないと云ふのは、何の爲めであるかと云ふと、其の人格が常に强い力を以つて私しに印象したからであります。斯うした人格は卽ち其の人が永らくの間世の艱難と戰つて、造りあげて來たのであります。卽ち是れを云ひかへますれば、其の人格が事實から造りあげられて居るのであります。

故に我々が言葉の理、卽ち人格を造るには、實際の上で苦勞をせなければなりません。そして其の人でなければ他の者では云ふ事の出來ない樣な事を、澤山云る樣になつたならば、それ





が卽ち其の人の人格となつて來るのであります。

斯うなれば其の人格が、深く人の心に喰ひ入つて行きますから、自然それが聲なき言葉となつて現れ、人に傳はつて行くのであります。然るに其の人格のない人はいくら立派な事を云ふても、其の實がありませんから其の場では聞いて居りまするが、日がたつと共に其の心から消えて行くのであります。故に人に話をする事を稽古する前に、是非是れは人に云はなければならぬと思ふ樣な事をして置かなければならんのであります。すれば講演などは稽古などせなくとも自然に出來る樣になるのであります。

□

普通では此の理と云ふ事を道理、若しくば眞理と云ふ意味に解されて居るのであります。無

論理と云ふ以上此の意味があるのは云ふ迄もありません。けれども此道で理と云ふ場合には、單に道理と云ふ意味ばかりではなく、其所に德と云ふ意味が加味されて居るのであります。即ち德と理とが合一したものを、指して云はれて居るのであります。

其の德と、道理とが合一したものを理と云ふのであつて、其の二者が教祖の生涯に於いて、具象化されて居るのであります。故に教祖が即ち理の一切の本源となるのであります。即ち教祖を外にしてお道に於ける理と云ふものは會得出來ないのであります。

然るに多くの人は理を單に道理と云ふ意味に解しますからお道の理と云ふ事か、理解出來ないのであります。お道を研究する人が多く躓くのは、此の理を正しく會得出來ないからであります。

そこで此の道の人々が、教祖の足跡を踏まして頂くと云のは、要するに此の理を受けんが爲めであります。故に此の理を受くると云ふ事は、理解すると云ふことではなく、其の心に同化





せられると云ふ事が尤も必要なのであります。即ち水に這入らずして、水の冷やかさを知るのではなく、自分が水に飛び込で、其の水の冷やかさを自覺するが如く、教祖の心に同化せられて、其の理を自覺して行のであります。御教祖の足跡を踏まして頂くと云ふことは、足跡を踏む其の事に意義があるのではなく、此の自覺を得るが爲めに其の必要が生じて來るのであります。

所が其の御教祖は、既に御歸幽になつてから三十有餘年を經過したのであります。故に現在では御教祖に直接御教化を受ると云ふ事は、出來ないと思ふ人があるかも知れません、けれども、是れは教祖の肉體のみに付いて見て居るのでありまして、教祖は何にも肉體のみに依つて見るべきものではありません。むしろ教祖の尊い所は精神にあるので、其の精神は教祖の歸幽と共に無くなつたものではありません。むしろ其の肉體が無くなつて始めて、其の光輝を增して來るのでありますから、其の精神に直接同化されて行くことに務めなければなりません。

所が其の核心は地場に伏せ込まれてあるのでありますから、地場が卽ち理の籠つて居る所になるのであります。故に此所にもある樣に、此の理のある所から理を受けて行かなければならぬので、其の他の所に於いてお道の理は得られないのであります。然るに、中には其所に氣が付かず、人や物を見て此の道の理を地場以外に、求め樣とする人が往々あるのであります。それで理のある所卽ち地場より外には理はないから、理の無い所へ理を求める樣なことはせぬ樣に仰せられたのであります。

□

此の御道は暫々申しました樣に、天然の道であり、自然の道であります。何故なら神樣の御働き下さる其の働きが、此の天然自然の理として働いて來るからであります。そして此の天然





自然の理に依つて、人間は生れもすれば成長もして來たのであります。故に何にも人間が進んで天然自然の理に從はなくとも、生きてゐる以上は何れも此の天然自然の理に從ふて居るのであります。だから殊更らに此の理に從はねばならないと云ふ事は、一寸考へたら必要がない事の樣にも思はれるのであります。

所が成程、人間の肉體と云ふものは此の天然自然の理に從はなければ、生きて行く事は出來ないので、これは誰れしも知つて居るのでありますが、其の心と云ふ事になると分らなくなるのであります、何故なら、心と云ふものは人間が自由に使はれる樣に、神樣から與へられて居りますから、天理に從ふても使へば、天理に反してでも使ふ事が出來るからであります。其所で如何かすると此の天理に反した心を使ひたがるのであります。何故なら天理に從ふて心を使ふと云ふ事は、自分が時に依ると束縛して居られる樣に思ふからであります。

然るに天理に反して心を使ふた結果は如何であるかと云ふに、暫らくの間は何んとか行ける

のであります。左樣なると人間は次第に大膽になつて、天理に從ふて暮すのは馬鹿〳〵しいと云ふ氣になつて、何んでも我意を通さうと云ふ樣になるのであります。若し此の儘で落ち付く事が出來たら仕合せなのでありますが、丁度弓の弦を引しぼつた如く、少し氣をゆるめると元の通りになつて來るのであります。それが天理に歸るのでありまして、其の時人間は樣々な不幸に出會はねばならぬことになるのであります。

所が天然自然に通るのは何だか物が遲れる樣に思ふたり、世の中から忘れられる樣に思ふ所から、又中では名譽を求めたり、地位や金を得たいと云ふ心から、此の天理を踏みはづして通る人が澤山あるのであります。そして又た、世の中の人は其の外面ばかりを見て、其の心を見ませんから、それが豪い事の樣に思ふて讃るのであります。其の爲めに天理の存在と云ふ事も打ち忘れて、鹿追ふ獵師山を見ずの例の通り、自分が間違ひの中に飛び込むのも知らないのであります。





所が御道は神樣に添ふ道でありますから、如何なる場合にも此の天然自然の理に從ふて通るのであります。從つて後れる樣ではありますが、中途で失敗する樣な事がありませんから、却つてそれが早やくなるのであります。そこでお道を通る人は、此の神樣の思召し通りに、如何なる場合にも此の天然の理に從ふて我が心を定め、又た其の理に從ふて何事もして行く樣にしたならば、必らず神の守護が添ふて來るのであります。

□

此の道は人間の心と、神樣との關係であります。從つて凡てが精神的のものであります。然るに親族と云ふのは肉體的の關係から成り立つて居るのであります。其の證據には同じ親の腹から生れた兄弟でも、親子の中でも、其の心は皆な違ふのであります。從つて兄が右に行こう

と云ふても、弟が左に行くと云やら分らず、親が前に行こうと云ふのに子が後に行こうと云ふやら分らんのであります。故に要する所、親族などは皆な肉體的な關係より無いのであります。

所が神様の道は自分の心と神様の關係でありますから、云ふ迄もなく精神的のものであります。從つて自分が信仰仕様と意志した以上、敢く迄も自分の自由であるべき筈であります。然るに中では自分が信仰して好いか、悪いかなど親族に相談する人があるのであります。他人が信仰したり、親族が信仰したりするのなら兎に角、自分が信仰するのに他の人に相談する必要はないのであります。是は肉體的の關係をもつて、精神的の關係を定めようとするのでありまして、それが抑も最始から大きい間違になつて居るのであります。

神様は親族やない、家族にも此の道の話をするのやないと仰せられたのであります。是れは何故かと申しますると、内々で話をすると若し其の話した事が心に合はぬ事や、其の人の悪行





を指摘する様な事があつたら、神様のお話と云ふ事を忘れてしもうて、常に自分のしている悪い所を見て道て、非難すると云ふ様な誤解が生じ易いからであります。世の中に此の誤解程恐ろしい事はありません。それが爲めに内が治まるべき筈の御話を聞きながら、治まらぬ様になる事が誤解から暫々起るのであります。それで内々で話をせず若し左様せなければならぬ時は、先輩なり教會の方々に願つて、御話をして頂く様にせなければならんのであります。

斯様に内々の御話でさへも神様は成るべく止めて御いでになるのでありますから、親族に對しては尚ほ更であります。幸ひ話をして好く取つて呉れたら好いが、反對に悪るくでも取れたら、それが爲めに相反目せなければならなくなります。それでは却つて神様の御心に反するのでありますから、向ふから聞かして呉と頼まれたら兎に角、左もない時は成るべく見合す様にせなければなりません。

斯う云ふ様に云ふと一寸不人情の様に思はれるかも知れませんが、いくら人情があつても人

を助けられるものではありません。人から見て不人情の樣に見ても、眞の心に眞があつたならば、神樣はその心を受取つて御守護下さるのであります。故に自分が親族を道に仕樣と云ふ樣な考へを起さずに、神樣の御守護に依つて神樣の理を聞く樣な機會を與へられる事を心から念じてあげねばなりません。それさへして居れば話は如何でもよいのであります。

□

人間個人の上から申しますると、心の揃ふと云ふのは決心の付く事を云のであります。即ち斯か、彼かと思ふて居る間は、心が二つあつて迷ふて居るのでありますが、其の二つの心の何れか〻無くなるか、敗るかして一つになつた時が、決心が付いたと云ふのであります。其の決心が出來て始めて神樣に御願ひするので、其の時始めて手を打のであります。





手を打つと云ふのは普通で如何云ふ場合に使ふかと申しますると、相談が纏つた時に手を打つと云ふのであります。商賣上に付いて申しましたら、買手が五十錢と云ひ賣手が一圓と云ふて居る、間は未だ話が定まりませんから手は打てぬのであります。所が相方とも讓歩して七十五錢で値が定まつたら、其所で手を打つたと云ふのでありす。

是と同じ事で、神樣の仰せられる事と、人間の心とが出合ふた時に、始めて手を打つて神樣に御願ひするのであります。然し神樣と云ふものは懸値など仰せられる方ではありませんから、神樣に讓歩して頂くと云ふ事は出來ないのであります。其所で人間の方から讓歩して行かなければならんので、それを云ひ換れば神樣の御心に從ふのであります。故に是れは一言で云へば神樣の思召し通になると云ふ心が定まつたら、手を打つと云ふことになるのであります。

すれば朝夕神樣を參拜すると云ふのは、如何云ふ譯かと申しますると、是れは挨拶して居るのも同じことであります。成程手は打ちまするが、それは此の場合に於ける手を打つのとは意味

が異ふのであります。然るに其の事を思はずに、手を打つて御願ひさへすれば、神様が御守護下さる様に何んでもないのに手を打つ人がありますが、是は神様の御心に通ふか如何か、よく見分けた上にせなければならぬのであります。

以上は個人に付て云ふたのでありますが、團體の上即ち教會などに付いて云へば、皆の人がよかろうと心が揃ふたら、手を打てと仰せられるのであります。其中で少しでも心を合さぬ人があつたら、兩手の指が曲んでいるのと同じで、手を打ことが出來ないのであります。だから皆の心が好かろうと云ふたら、其の時手を打つて神様に願へば、神様は御聞き下さるのであります。何故なら神様は皆んな寄て間違つたら、神が許すと仰せられた事もあるからであります。故に人は本當の手が打てる様にならねばなりません。



昭和二年一月二十日印刷
昭和二年一月廿五日發行
奈良縣山邊郡丹波市町三島
著作兼發行者　增野道興
奈良縣山邊郡丹波市町川原城
印刷所　天理教々廳印刷所
右代表者　辻豐彦

終